

# 不思議の国のアリス

ルイス・キャロル 著

ジョン・テニエル 絵

翻訳 山形浩生

©1999 山形浩生

プロジェクト杉田玄白 正式参加作品。詳細は <http://www.genpaku.org/> を参照のこと。この work は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの下でライセンスされている。著作権者名を残し、この同一条件下で公開する限りにおいて、訳者および著者にたいして許可をとったり使用料を支払ったりすることいっさいなしに、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製・改変が認められる。「同一条件下」だから、「禁無断複製」とかいうのはダメだぞ)





それは黄金の昼下がり

気ままにただようぼくら

オールは二本ともあぶなげに

小さな腕で漕がれ

小さな手がぼくらのただよいを導こうと

かつこうだけ申し訳につけて

ああ残酷な三人！　こんな時間に

こんな夢見る天気のもとで

どんな小さな羽さえもそよがぬ

弱い息のお話をせがむとは！

でもこの哀れな声一つ

三つあわせた舌に逆らえましょうか？

居丈だかなプリマがまずは唱える

その宣告は「おはじめなさい」

すこし優しげに二番手の希望

「でたらめをいれること」

そして三番手が語りをさえぎること

一分に一度以上ではないにせよ

すぐに、とつぜんの沈黙が勝利

想像で彼女らが追いかける

夢の子が奔放で新しい謎の地を

動き回るのを追って

鳥や獣と親しく語る――

そしてそれを半ば真に受け

そしてやがて、お話が渴えると

想像の井戸も枯れ

そして疲れた語り手が

肩の荷をおろそうとすれば

「つづきはこんど——」「いまがこんどよ！」  
と声たちがうれしそうにさけぶ。

かくして不思議の国のお話がそだち

ゆつくり、そして一つ一つ

その風変わりなできごとがうちだされ——

そして今やお話は終わり

そしてみんなでおうちへと向かう

楽しい船乗りたちが夕日の下で

アリス！ 子どもじみたおとぎ話をとって

やさしい手でもって子供時代の

夢のつどう地に横たえておくれ

記憶のなぞめいた輪の中

彼方の地でつみ取られた

巡礼たちのしおれた花輪のように

# 一 うさぎの穴をまつさかさま

アリスは川辺でおねえさんのよこにすわって、なんにもすることがないのでとても退屈たいくつしはじめていました。一、二回はおねえさんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、そこには絵も会話もないのです。「絵や会話のない本なんて、なんの役にもたたないじゃないの」とアリスは思いました。

そこでアリスは、頭のなかで、ひなぎくのくさりをつくつたら楽しいだろうけれど、起きあがってひなぎくをつむのもめんどくさいし、どうしようかと考えていました（といつても、昼間で暑いし、とつてもねむくて頭もまわらなかつたので、これもたいへんだつたのですが）。そこへいきなり、ピンクの目をした白うさぎが近くを走つてきたのです。



それだけなら、そんなにめずらしいことでもありませんでした。さらにアリスとしては、そのうさぎが「どうしよう！ どうしよう！ ちこくしちやうぞ！」とつぶやくのを聞いたときも、それがそんなにへんてこだとは思いませんでした（あとから考えてみたら、これも不思議に思うべきだったのですけれど、でもこのときには、それがごく自然なことに思えたのです）。でもそのうさぎがほんとうに、チョッキのポケットから懐中時計かいちゆうどけいをとりだしてそれをながめ、そしてまたあわててかけだしたとき、アリスもとびあがりました。というのも、チョッキのポケットなんかがあるうさぎはこれまで見たことがないし、そこからとりだす時計をもっているうさぎなんかも見たことないぞ、というのに急に気がついたからです。そこで、興味きょうみしんしんになったアリスは、うさぎのあとを追っかけて野原をよこぎって、それがしげみの下、おつきなうさぎの穴にとびこむのを、ぎりぎりのところで見つけました。

次の瞬間しゆんかんに、アリスもそのあとを追っかけてとびこみました。いつ



たいぜんたいどうやってそこから出ようか、なんてことはちつとも考えなかったのです。

うさぎの穴は、しばらくはトンネルみたいにまっすぐつづいて、それからいきなりズドンと下におりていました。それがすごくいきなりで、アリスがとまろうとか思うひまもあればこそ、気がつくとなにやら深い井戸みたいなところを落っこちているところでした。

井戸がとつても深かったのか、それともアリスの落ちかたがゆつくりだったのかもしれませんが。だってアリスは落ちながら、まわりを見まわして、これからどうなっちゃうんだろうと考えるだけの時間がたっぷりあったからです。まずは下をながめて、どこに向かおうとしているのかを見きわめようと思いました。でも暗すぎてなにも見えません。それから井戸の横のかべを見てみました。するとそこは、食器だなど本だなだらけでした。あちこちに、地図や絵がとめ金に引っかけてあります。アリスは通りすがりに、たなの一つからびんを手にとってみました。「マーマレード」というラベルがはってあります。が、空っぽ

だったの、とてもがっかりしてしまいました。下にいる人を殺したくはなかったの、びんを落とすのはいやでした。だから落ちる通りすがりに、なんとか別の食器だなにそれを置きました。

アリスは思いました。「でもこんなに落ちたあとなら、もう階段をころげ落ちるなんて、なんとも思わないわよ！ おうちじゃみんな、あたしがすごく勇敢（ゆうかん）だと思おうでしょうね！ ええ、おうちのてっぺんから落っこちたって、もう一言も文句を言わないはずよ」（そりゃまあそのとおりでしょうけど）

下へ、下へ、もつと下へ。このままいつまでもずっと落ちてくのでしょうか？「いままでもう何マイルくらい落ちたんだろ」とアリスは声に出して言いました。「そろそろ地球のまん中くらいにきたはず。えーと、そうになると四千マイルくらい落ちたことになる、のかな——」（つまりね、アリスは教室の授業で、こんなようなことをいくつか勉強していたわけ。で、このときはまわりにだれもいなかったから、もの知りなのをひけらかすにはあまりつごうがよくはなかったんだけど、

でもこうして暗唱してみると、いいれんしゅうにはなつたつてこと」——そうね、きよりはそんなもんね——でもそれだと、緯度や経度はどこらへんにきたのかしら」（アリスは緯度や経度つてのがなんなのか、まるつきり見当もついてなかつたけれど、でも口にだすのにかっこいい、えらそうなことばだと思つたわけね）

しばらくして、アリスはまたはじめました。「このまま地球をドンツとつきぬけて落ちちやうのかな！ 頭を下にして歩く人たちのなかに出てきたら、すつごくおかしく見えるでしょうね！ それつてたとえれば日本とかだとあるぜん人、だつけ——」（ここではだれも聞いてる人がいなくて、アリスはむしろホツとしたんだ。だつてどう考えても正しいことばには聞こえなかつたし）「——でも、国の名前はだれかにきかないと。あの、奥さま、ここつてニュージーランドでしょうか、オーストラリアでしょうか？」（そしてアリスは、しゃべりながらおじぎをしようとした——宙を落つこちながら会釈をするなんて、考えてもごらんよ！ きみならそんなこと、できると思う？）「そしたらその

方、そんなことを聞くなんて、あたしのことをすごくバカな女の子だと思っちゃうわ！　だめだめ、そんなこと聞いちゃ。どっかに書いてあるのが見つかるかもしれない」

下へ、下へ、もつと下へ。ほかにすることもなかったの、アリスはまたしゃべりだしました。「今夜、ダイナはあたしがいなくてさびしがるでしょうね！」（ダイナつてのはねこ。）「お茶の時間に、みんなダイナのミルクのお皿を忘れないでくれるといいけど。かわいいダイナ！　おまえがいつしよにここへいてくれたらいいのに！　空中にはネズミはいないみたいだけれど、コウモリがつかまるかもしれないわよ、コウモリつてすごくネズミみたいなんだから。でもねこつてコウモリ食べるのかな？」そしてここで、アリスはいささか眠くなつてきて、ちよつと夢うつつっぽい感じで、こうつぶやきつづけました。「ねこつてコウモリ食べる？　ねこ、コウモリ食べる？」そしてだんだん「ねこもりつて食べる？」とも。だって、どの質問にも答えられないので、どれをきいてもあんまりちがわなかったのですね。うつらうつ

らしてきて、ダイナと手に手をとって歩いている夢を見はじめました。そしてその中で、とても真剣にこうきいています。「さあダイナ、正直におつしやい。おまえ、コウモリ食べたことあるの？」とそのときいきなり、ズシン！　ズシン！　アリスは小枝と枯れ葉の山のでつぺんにぶつかつて、落ちるのはもうそれつきり。

けがはぜんぜんなくて、すぐにとび起きました。見上げても、頭上はずつとまつ暗。目の前にはまた長い通路があつて、まだ白うさぎがその通路をあわてて走つていくのが見えました。これは一刻もむだにできません。アリスはびゅーんと風のようにかけだして、ちようどうさがかがどを曲がりしなに「やれ耳やらヒゲやら、こんなにおそくなつちやつて！」と言うのが聞こえました。そのかどをアリスが曲がつたときには、かなり追いついていました。が、うさがどこにも見あたりません。そこは長くて天井のひくいろうかで、屋根からランプが一列にぶら下がつて明るくなつていました。

そのろうかとはびらだらけでしたが、どれも鍵がかかっています。

アリスは、ろうかの片側をずっとたどって、それからずっともどつてきて、とびらをぜんぶためしてみました。どれも開かないので、アリスはろうかのまん中をしょんぼり歩いて、いつたいどうやってここから出ましようか、と思案するのです。



いきなり、小さな三本足のテーブルにでくわしました。ぜんぶかたいガラスでできています。そこには小さな金色の鍵がのついているだけで、アリスがまつ先に思ったのは、これはろうかのとびらのどれかに合うんじゃないかな、ということでした。でもざんねん！ 鍵穴が大きすぎたり、それとも鍵が小さすぎたり。どっちにしても、とびらはどれも開きません。でも、二回目にごるつとまわってみたところ、さつきは気がつかなかったひくいカーテンがみつかりました。そしてそのむこうに、高さ40センチくらいの小さなとびらがあります。さっきの小さな金色の鍵を、鍵穴に入れてためしてみると、うれしいことにぴつたりじゃないですか！

あけてみると、小さな通路になっていました。ネズミの穴くらいの大きさしかありません。ひざをついてのぞいてみると、それは見たこともないようなきれいなお庭につづいています。こんな暗いろうかを出て、あのまばゆい花だんやつめたいふん水の間を歩きたいなあ、とアリスは心から思いました。でも、その戸口には、頭さえとおらない



のです。「それに頭はとおったにしても、かたがないとあんまり使いものにならないわ」とかわいそうなアリスは考えました。「ああ、望遠鏡みたいにちぢまれたらな！　できると思うんだ、やりかたさえわかれば」というのも、近ごろいろいろへんてこりんなことが起こりすぎたので、アリスとしては、ほんとうにできないことなんて、じつはほとんどないんだと思いますはじめていたのです。

その小さなとびらのところで待っていてもしかたないので、アリスはテーブルのところに戻りました。別の鍵がのつてたりしないかな、となかば期待していたのです。あるいは少なくとも、望遠鏡みたいにちぢまるやりかたを書いた、規則の本でもないかな、と思いました。するとこんどは、小さなびんがのつかつていて（「これつてきつきはぜったいになかったわよねえ」とアリスは言いました）、そしてびんの首のところには紙のふだがついていて、そこに「のんで」ということばが、おつきな字できれいに印刷されていました。



「のんで」は結構なのですけれど、でもかしこいアリスは、そんなことをあわててするような子ではありません。「いいえ、まずちゃんとして見てみようつと。『毒』とか書いてないかどうか、たしかめるんだ」とアリス。というのも、お友だちに教わったかんたんな規則をまもらなかつたばかりに、やけどをしたり、野獣に食べられちゃったりした子供たちについて、すてきなお話をいくつか読んだことがあつたからです。そういう規則というのは、たとえばまっ赤にやけた火かき棒をあんまり長くにぎっているとやけどをするよ、とか、指をナイフでとおつてもふかく切っちゃったら、たぶん血が出てくるよ、とかですね。そして『毒』と書いてあるびんの中身をたくさん飲んだら、たぶんまちがいでなく、いずれ困ったことになるよ、というのも、アリスはぜったいにわすれなかつたのでした。

でも、びんには「毒」とは書いてありませんでした。そこでアリスは、ためにしに味見をしました。そしてそれがとってもおいしかったので（どんな味かというと、チェリータルトと、カスタードと、パイナツ

プルと、しちめんちようローストと、トフィーと、熱いバターつきトーストをまぜたような味ね)、すぐにそれをのみほしてしまいました。

\* \* \* \* \*

「へんなの、へんなの！」とアリス。「あたし、望遠鏡みたいになちぢまっちゃうてるのね」

そしてたしかにそのとおり。アリスはいまや、身のたけたったのセンチ。これであの小さなとびらをとおって、あのきれいなお庭にくのにちようどいい大ききになったと思つて、アリスは顔をかがやかせました。でもまず、もう何分かまつてみて、もつとちぢんじやわないかどうかたしかめました。これはちよつと心配なところでした。「だつてあたしがロウソクみたいに、ぜんぶ消えちやつておしまいになるかもしれないでしょ」とアリスはつぶやきました。「そうなつたらあたし、どうなっちゃうんだろ」そしてアリスは、ロウソクをふき消した

あとで、ロウソクの炎がどんなようすかを想像してみようと思いました。というのも、そんなものを見たおぼえがなかったからです。

しばらくして、それ以上なにもおきないのがわかって、アリスはすぐにお庭にいらおうときめました。でもかわいそうなアリス、ぎんねんでした！ とびらのところにきてみると、あの小さな金色の鍵をわすれてきたのに気がついたのです。そしてテーブルのところに戻つてみると、ぜったいに手がとどきません。ガラスごしに、とてもはつきりと見えてはいます。アリスはがんばってテーブルの脚をよじのぼろうとしましたが、つるつるでだめです。そしてがんばったあげくにつかれきつて、かわいそうなこの子は、すわって泣き出してしまいました。

「こら、そんなふう泣いてちゃだめぞ！」とアリスは、ちよつときびしく自分に言いきかせました。「いいわね、いますぐ泣きやみなさい！」アリスが自分にする忠告は、とてもりっぱなものが多いのです（そのとおりにはほとんどなかったんだけどね）。そしてときどきは、自分をきびしくしかりすぎて、涙が出てくるほどでした。い

ちどなんか、自分相手にやっていたクロケーの試合でいんちきをしたので、自分の耳をぶとうとしたくらい。というのも、このふうがわりな子は、一人で二役をやるのがとても好きだったからです。「でもいまじゃ、二役をやってみてもしょうがないわよね。だってあたしはもうほとんど残ってなくて、まともな人間一人にも足りないくらいなんだもの！」とかわいそうなアリスは考えました。

やがて、テーブルの下の小さなガラスのはこが、アリスの目にとまりました。あけてみると、中にはとつてもちっちゃなケーキが入っていて、ほしぶどうで「たべて」ときれいに書いてあります。「食べちゃおうと」とアリス。「これで大きくなれたら、鍵に手がとどくでしょ。小さくなるようなら、とびらの下からもぐれるな。だからどつちにしてもあのお庭には行けるわけよね。あたしはどつちだつていいわ！」

ちよつと食べてみて、アリスは心配そうに自分に言いました。「どつちかな? どつちかな?」そして頭のでつぺんに手をやって、自分がどつちにのびているかを確かめようとします。ところが同じ大きさの

ままだったので、アリスはとつてもびつくりしました。そりゃたしかに、ふつうはケーキを食べるとそうなるのですが、アリスはへんてこりんなことを期待するのになれすぎちゃっていたもので、人生がふうのやり方でつづくなんていうのは、すごくつまんなくてばかばかしく思えたのです。

そこでアリスはそのままつづけて、じきにケーキをたいらげてしまいました。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*





## 二 涙の池

「チョーへん！」とアリスはさげびました（びつくりしすぎて、ちゃんとしたしゃべりかたを忘れちゃったんだね）。「こんどはこの世で一番おっきな望遠鏡みたいに、ぐんぐんのびてる！ 足さん、さよなら！」（だって足を見おろしたら、もうほとんど見えなくなっていて、どんな遠くなっているのです）。「ああ、かわいそうな足さん、これからだねが、くつやストッキングをはかせてあげるんだらう。あたしにはぜつたいにむりなのはたしかね！ すつごく遠くにいすぎて、あなたたちのことにはかまわってられないの。できるだけ自分でなんとかしてね——でも、親切にしないとあげないと」とアリスは思いました。「そうしないと、あたしの行きたいほうに歩いてくれないかも！ そうねえ。クリスマスごとに、新しいブーツをあげようつと」

そしてそれをどうやろうか、アリスはほんとに計画をはじめました。「運送屋さんにおねがいしないと。でもすつごく変でしょうね、自分の

足におくり物をおくるなんて！ それにあて先もずいぶんとおかしなものになるな。

だんろのかなあみ付近

じゅうたん気付

アリスの右足閣下へ

(アリスの愛をこめて)

あらあらあたし、なんてばかげたことを言ってるんだろ！」

ちようどそのとき、頭がろうかの天井にぶつかりました。もうそのとき、アリスは身長三メートルになっていたので、すぐに小さな金色の鍵を手にとって、お庭へのとびらへといそぎました。

かわいそうなアリス！ できることといったら、ねそべって片目でお庭をのぞくことだけでせいっぱい。でも、とおりぬけるなんてまったく絶望的。アリスはまたすわって泣き出しました。

「はじを知りなさい」とアリスは言いました。「そんなおつきななり

をして」（まあたしかにそのとおり）「いつまでも泣いてばかり。いますぐやめなさい、いいわね！」でもアリスは、それでもかまわず泣きつづけて涙を何リットルも流したので、まわりじゅうにおおきな池ができてしまいました。深さ10センチくらいで、ろうかの半ばまでつづいています。



しばらくすると、遠くからピタピタという小さな足音が聞こえたので、あわてて涙をふいて、なにがきているのかを見ようと思いました。あのうさぎが、りっぱな服にきがえてもどつてくるところで、片手には白い子ヤギ皮の手ぶくろ、そしてもう片方の手にはおつきなせんすを持っていました。とつてもいそいで走っていて、こつちにきながらも「ああ、公爵夫人が、公爵夫人が！ 待たせたりしたら、なさけようしやなんかありやしない！」とつぶやいています。アリスのほうは、もうせつぱつまっていて、だれでもいいから助けてほしい気分。そこでうさぎが近くにきたときに、小さなおちついた声でこうきりだしました。「あの、おねがいですから——」うさぎは、うつひやあととびあがつて、子ヤギ皮の手ぶくろとせんすを落としてしまい、ぜんそくりよく全速力で暗闇の中へとかけ去っていつてしまいました。

アリスはせんすと手ぶくろをひろって、ろうかがとても暑かったので、せんすでおおぎながらしゃべり続けました。「あらまあ、きょうはなにかもふうがわり！ きのは、ほんといつもどおりだったの

に。あたし、夜のあいだに変わっちゃったのかしら。そうねえ。起きたときには、おんなじだったつけ？ なんだかちよつと変わった気分だったような気もするみたい。でも、おんなじじゃないんなら、つぎの質問は、いまのあたしはいつたいぜんたいだれ？ それがかんじんななぞだわ！」そしてアリスは、おないどしの子たちを思いうかべていつて、そのなかのだれかにかわつてしまったかどうかを考えてみました。

「エイダじゃないのは確かだわ。エイダのかみの毛は、とつても長い巻き毛になるけど、あたしのかみはぜんぜん巻き毛にならないもの。それとぜつたいにメイベルじゃないはず。だつてあたしはいろんなことを知つてるけど、メイベルときたら、まあ！ もうなんにも知らないでしょう！ それに、あの子はあの子だし、あたしはあたしだし、それに——あれ、わかんなくなつてきちゃった！ まえに知つてたことをちゃんと知つてるか、ためしてみよう。えーと、四五の十二で、四六の十三で、四七が——あれ、これじゃいつまでたつても二十になら

ないぞ！　でも、かけ算の九九はだいじじゃないわ。地理をためしてみよう。ロンドンがパリの首都で、パリはローマの首都で、ローマは——ぜんぜんちがうな、ぜつたい。じゃあメイベルになっちゃったのね！『えらい小さな——』を暗唱してみよう」そしてアリスは、授業でするみたいにひぎの上で手を組んで、暗唱をはじめましたが、声がしゃがれて変てこで、ことばもなんだか前とはちがっていました——

「えらい小さなワニさん

ぴかぴかのしつぽをみがいて

金色のうろこひとつずつを

ナイルの水であらいます！」

「うれしそうにいたりと

なんてきれいにツメをひろげて

小さな魚をよびいれます

やさしく笑うその大口で！」

「いまの、ぜったいにまちがってるはずだわ」とかわいそうなアリスは言つて、目に涙をいっぱいにかべてつづけました。「じゃあやつぱりメイベルなんだ、そしたらあのちつぽけなおうちにすんで、あそぶおもちゃもまるでなくて、ああ！ それにお勉強しなきゃならないことが、ほんとに山ほど！ いやよ、決めた。もしあたしがメイベルなら、このままここにいろわ！ みんなが頭をつつこんで『いい子だからまたあがつてらつしやい！』なんて言つてもむだよ。こつちは見上げてこう言うの。『だったらあたしはだれ？ まずそれを教えてよ。それでもしその人になつていいなと思つたら、あがつてくわ。そうでなければ、べつの人になれるまでここにいろ』——でも、あーあ！」とアリスは、いきなり涙をながしてさけびました。「ホントにだれか、頭をつつこんでくれないかな！ もう一人ぼっちでここにいろのは、すつごくあきあきしちやつたんだから！」

こう言いながら手を見おろしてみると、おどろいたことにうさぎの小さな子ヤギ皮の手ぶくろが、手にはまつてしまつていました。「どう



してこんなことができちゃったんだろう？」とアリスは思いました。「あたし、また小さくなってるんだ」立ち上がってテーブルのところへ行って、それと比べてせたけをはかってみると、まあだいたいの見当ですが、いまや身長60センチくらいで、しかもぐんぐんちぢみつづけています。やがてその原因が、手にもったせんすなのに気がついて、あわててそれを落としました。あぶないところで、ちぢみきつて消えてしまわずにすんだのです。

「いまのはまさにきき一発だったわ」アリスは、いきなり変わったせいでとてもおびえてはいましたが、まだ自分がそんざいしているのを見て、とてもうれしく思いました。「さあ、そしたらお庭ね！」と、あの小さなとびらをめざしてぜんそくりよくでかけもどりました。が、ざんねん！ 小さなとびらはまたしまっていて、小さな金色の鍵は、さつきとかかわらずガラスのテーブルのうえで、「しかもさつきよりもひどいことになってるじゃないの」とあわれな子は考えました。「だってこんなに小さくなったのははじめてよ、ぜったい！ まったくざんね

んしごくと断言しちやうわ！  
」



そしてこのせりふを口にしたとたん足がすべって、つぎのしゅんかんには、ボチャン！ あごまで塩水につかっていたのです。最初に思ったのは、どういうわけか海に落ちたんだろう、ということでした。「それでもしそうなら、列車で帰れるわね」と思いました。（アリスは生まれてから一回だけ海辺にいったことがあって、そこからひきだした結論として、イギリスの海岸ならどこへいっても海には海水浴装置（かいすいよくそうち）があり、子どもが木のシャベルで砂をほって、海の家がならんでいて、そのうしろには列車の駅があるもんだと思っていたんだな）。でも、すぐに気がついたのは、自分がいるのはさつき身長3メートルだったときに泣いた涙の池の中だ、ということでした。

訳者のせつめい海水浴装置、というのは、むかしは水着になったところが、見えるとイヤラシイとみんな思ってたから、タンクみたいなものに入って、それでそれごと海に入れてもらったんだって、そのタンクのこと。

「あんなに泣かなきゃよかった！」とアリスはあちこち泳いでそこから出ようとしました。「おかげでいま、おしおきを受けているんだわ、自分の涙におぼれて！ それってどう考えても、ずいぶんと変なことよね！ でもきょうは、なにかも変だから」

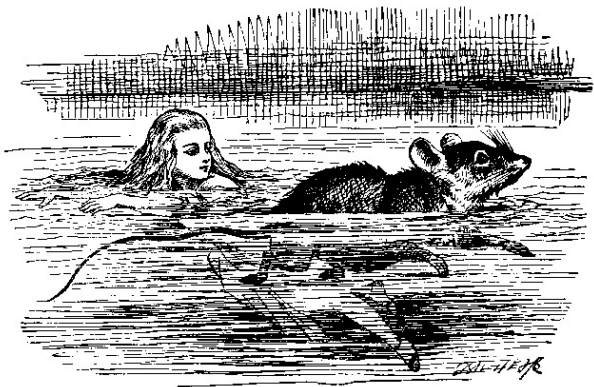
ちょうどそのとき、すこしはなれたところで、なにかがばちやばちやしているのが聞こえました。そこでそつちのほうに泳いで、なんだか調べてみました。最初はそれがセイウチかカバにちがいないと思ったのですが、そこで自分がすごく小さくなっているのを思い出しました。そしてやがてそれが、自分と同じようにすべってこの池にはまってしまった、ただのネズミなのがありました。

「さてさて、ここでこのネズミにはなしかけたら、どうにかなるかしら？ ここではなんでもすつごくずれてるから、たぶんこのネズミもしゃべれたりするんじゃないかと思うんだ。まあどうせ、ためしてみるのはいいでしょう」そう考えて、アリスは口を開きました。「おネズミよ、この池からでるみちをごぞんじですか？ ここで泳いで

て、とつてもつかれちゃったんです、おおネズミよ！」（アリスは、ネズミにはなしかけるにはこれが正しいやりかたなんだろうと思つたわけだね。そんなことはこれまでしたことがなかったけれど、でもおにいさんのラテン語文法書で見かけたのを思い出したんだ。「ネズミは——ネズミの——ネズミへ——ネズミを——ネズミよ！」ネズミは、いささかさぐるような目つきでアリスをながめて、小さな目のかたほうでウィンクしたようでしたが、なにもいいません。

「もしかして、ことばがわかんないのかな？ 征服王ウィリアムといつしよにきた、フランスねずみにちがいないわ」（歴史のことはいろいろ知つていても、アリスはいろんなことがどれだけむかしに起きたか、あまりちゃんとはわかつていかなかったんだね）。そこでアリスはもういつかい口をひらきました。「*Ou est ma chatte?*（わたしのねこはどこですか?）」これはフランス語の教科書の、一番最初に出ている文だったのです。ねずみはいきなり水からとびだして、こわがつてガタガタふるえだすようでした。「あらごめんさい！」とアリスは、動

物のきもちをきずつけたかな、とおもつてすぐにさげびました。「あなたがねこぎらいなの、すっかりわすれてたから」





「ねこぎらい、とはね！」とネズミは、かん高くてきつい声でさけびました。「あんたがぼくなら、ねこが好きになるかね？」

「ええ、そりやならないかもしれませぬね」とアリスは、なだめるように言いました。「どうか怒らないでくださいな。でも、うちのねこのダイナをお目にかけられたらいいのに。あの子をひと目でも見れば、ねこも気に入るようになるんじゃないかと思うんです。とつてもかわいくておとなしいんですよ」とアリスは、池のなかをゆったりと泳ぎながら、なかば自分に向かって話しつつづけました。「それでだんろのところでのどをならしてると、手をなめたり顔を洗ったりして、すごくかわいいんです——それにあやすととつてもやわらかくてすてきで——あと、ネズミをつかまえるのが名人級めいじんきゆうで——あらごめんさい！」とアリスはまたさけびました。ネズミはこんどはからだじゅうの毛をさかだてていて、ああこんどはまちがいなく、本気で怒ってるな、とわかります。「もしよろしければ、わたしたちもう、あの子の話はよしましようね」

「わたしたち、だと！」とネズミは、しつぽの先までガタガタいわせてさげびました。「ぼくが、そんな話をするとも思うか！　うちの一族は、ずっとねこがだいきらいなんだ。いやらしい、低級ていきゅうで俗悪ぞくあくな生き物！　二度と名前もききたくない！」

「はい、ぜつたいに！」とアリスは、あわてて話題を変えようとしてました。「それなら、もしかすると——犬——はお好き——かしら？」ネズミは返事をしなかつたので、アリスは熱心につづけました。「うちの近くには、すぐくかわいい小さな犬がいるんですよ、もうお目にかけたいくらい！　小さくて目のきれいなテリアなんです、それも、すぐく長くてクルクルした毛をしてて！　それでもものを投げるととつてくるし、ごはんのときにはおすわりしておねがいするし、いろんな芸もして——半分も思い出せませんですけど——そしてそれを飼つてるのがお百姓さんで、その人の話だとしてもちょうほうしてるんですつて。百ポンドの値打ちがあるそうよ！　だってネズミをみんな殺すし、それに——あらどうしましょ！」とアリスはかなしそうな声で

さげびました。「また怒らせちゃったみたい！」というのもネズミは、おもいつきりアリスから遠くへ泳ごうとしていて、おかげで池にはか  
なりの波がたつていました。

そこでアリスは、やさしくよびかけてみました。「ねえねずみさん、おねがいだからもどつてらして。おきらいでしたら、ねこの話もイヌの話もしませんか！」ネズミはこれをきいて、くるりと向きをかえてゆつくりこつちに泳いできました。顔はかなりまっさおです（怒つたのね、とアリスは思いました）。そしてひくいふるえる声で言いました。「岸にたどりつこう、そうしたらぼくの話をしてあげよう。なぜねこや犬がきらいなのか、それでわかるだろう」

そしてちやうどそこを出るところあいでもありました。池には鳥や動物がどんだんはまつてきて、すぐくこんできたからです。アヒルにドー、インコに子ワシ、そしてその他めずらしい生き物がいくつか。アリスがせんとうにたつて、一同みんな、岸におよぎつきました。

## 三二　　がくがくかけつことながいお話

岸边にあつまつた一同は、じつにへんてこな集団でした——鳥たちは羽をひきずり、動物たちはけがわがべつたりはりついて、みんなびしょぬれでしずくをボタボタたらしっていて、きげんもいごこちもわるかったのです。

最初の問題はもちろん、どうやってからだをかわかさうか、ということでした。これについてみんな相談して、ものの数分でアリスは、その動物たちを生まれてからずっと知っていたみたいに、なかよくしゃべっていてもあたりまえに思えてきました。そしてインコとはかなりながい議論をしたあげく、インコはついにつんと顔をそむけて、「ぼくのほうが歳上なんだから、ぼくのほうがちゃんとかわかってるんだ」としか言わなくなってしまうました。そしてアリスのほうは、そのインコが何歳なのか知らないうちは、しょうちでできなかったのですけれど、インコはぜつたいに歳を教えようとはしなかったもので、それ以上

は話になりませんでした。

ついにネズミが、どうも一同のなかではえらい動物だったみたいで、こう宣言しました。「すわつて、そしてぼくの話をしきなさい！ ぼくがみんなをすぐに乾燥かんそうさせてあげよう！」みんなすぐに、おつきなわになつてすわり、ネズミを囲みました。アリスは心配そうにネズミを見ていました。はやく乾燥かんそうしないと、ぜつたいにひどいかぜをひいちやうな、と思つたからです。

「えへん」とネズミは、さもえらそうに言いました。「みんな用意はいいかな？ これはぼくの知るかぎりで、一番無味乾燥むみかんそうなしろものだ。はいみんな、おねがいだからおしずかに！ 『征服王ウィリアムの動機はローマ法王に支持を受け、じきにイギリス人たちを下したのであるがそのイギリス人たちは指導者を求めており、当時は王位篡奪と征服には慣れてしまつていた。マーシアとノーサンブリアの太守たるエドウィンとモルカールは——』」

「うげつ」とインコが、みぶるいして言いました。

「なんですと？」とネズミが顔をしかめながらも、とつてもれいぎ正しく言いました。「なにかおっしゃいましたか？」

「ぼくじゃないですよ！」とインコはあわてていいいます。

「きみだと思ったんだが」とネズミ。「——先をつづけよう。『マシアとノーサンブリアの太守たるエドウィンとモルカールはかれへの服従を宣言。さらにカンタベリーの愛国的枢機卿たるステイガンドも、より賢明なる策を見つけんとして——』」

「なにより？」とアヒル。

「も、より」とネズミは、ちよつときつい言い方でこたえました。

「きみは『も』がわからんのかね」

『も』くらい知ってるけどね」とアヒル。「でもわたしが『より』るときには、なによりかはわかるもんだ。カエルより、とかミミズより、とか。でもわかんないのは、その枢機卿は、なにより賢明な策を見つげようとしたわけ？」

ネズミはこの質問を無視して、いそいで先をつづけました。「『——

より賢明なる策を見つけんとしてエドガー・アセリングとともにウィリアムに面会に赴き彼に王座を与えたのであった。ウィリアムの行いは当初は穩健だった。しかしその配下のノルマン人たちの傲慢ぶりは——」感想（かんそう）はどうだね、お嬢さん？」とネズミは、しゃべりかけでアリスに向かって言いました。

「びしょぬれのまんま」とアリスは、ゆううつな声で言いました。「ぜんぜん乾燥してくれないみたい」

「かくなるうえは」とドードーがたちあがって、おもおしく述べました。「審議の一時中断動議を提出するものであります、しかる後に一層活力的なる対処法を遡及的速やかに採択すべく——」

「日本語しゃべれえ！」と子ワシがいました。「そんなむずかしいことば、半分もわからんぞう、それにもつというと、どうせあんただってわかってないんだらう！」そして子ワシは顔をかがめて、こつそりと笑いました。ほかの鳥たちは、きこえよがしにくすくす笑いをしています。

ドードーは、むっとして言いました。「なにを言いたいかというと、からだをかわかすには、がくがくかけっこが一番だつてことだよ」

「がくがくかけっこつて、いったいなんですか？」とアリス。べつにしりたいたいと思わなかつたのですが、ドードーがそこで口をとめて、だれかが口をはさむべきだと思つてるみたいだし、ほかにだれもききたそうじゃなかつたのです。

ドードーは言いました「おやおや、一番いい説明は、じっさいにやってみることだよ」（冬の日なんかには、きみたちもやってみるといいぞ。だからドードーのやりかたを説明しておこうか）

まずドードーは、なんとなく丸いかんじのかけっここのコースをつくりました（「せいしくなかなかたちはどうでもいいんだよ」だそうです）。それから一回みんな、そのコースのあちこちでいちにつきます。そしてだれも「よいい、どん！」といわないのに、みんなすきなときに走りだして、勝手なときに止まつたので、いつかけっこがおわつたのかなかなかわかりませんでした。でも、みんな三〇分かそこら走つて、か



なりかわいてくると、ドードーがいきなりどなりました。「かけっこおわり！」するとみんなドードーのまわりにむらがつて、はあはあいいながら、ききました。「でも、だれが勝ったの？」

この質問は、ドードーとしてもずいぶん考えこまないとこたえられませんでした。そこで、ドードーはながいこと、ひとさし指をおでこにあててすわりこみ（シェイクスピアの絵をみると、いつもこういうかつこうをしてるよね）、のこりはだまつてまつています。とうとうドードーはいいました。「みーんな勝ったんだよ、だから全員が賞品をもらわなきゃ」

「でも、だれが賞品をくれるの？」かなりの声がいっせいにききました。

「そりやこの子に決まつてるだろう」とドードーは、アリスを指さしました。するとみんながアリスのまわりにむらがつて、くちぐちにさげびます。「賞品！ 賞品！」

アリスはどうしたらいいかさっぱりわからず、困ってしまつてポケット

トに手をいれると、キャンデーのはこがでてきました。（運よく塩水はそこまで入ってこなかったんだ）そしてそれを賞品としてわたしてまわりました。ちようどみんなに一つずつありました。

「でもこの子だって、自分も賞品をもらわないと、ねえ」とネズミ。「もちろんだ」ドードーは、とつてもえらそうです。そして「ポケツトにはほかになにかもつとるかね？」とアリスにいいました。「ゆびぬき一つだけ」アリスはかなしそうにいいました。



「よこしなさい」とドードー。

するとみんな、またアリスのまわりにむらがつて、するとドードーがおもおもしろくそのゆびぬきを授与しました。「われら一同、このゆびなゆびぬきをおうけとりいただきたく、心からおねがいするものである」そして、ドードーのこのみじかい演説が終わると、みんなかんせいをあげました。

アリスは、なにもかもずいぶんとぼかばかしいな、とは思ったのですが、みんながとつてもまじめなようすだったので、死んでもわらつたりできませんでした。そして、なにを言つていいか思いつかなかつたので、ちよつとおじぎをしただけで、なるべくまじめくさつたようすで、ゆびぬきをうけとりました。

つぎに、みんながキャンデーを食べるばんです。これはかなりそうぞうしい混乱こんらんをひきおこしました。おおきな鳥は、キャンデーが小さくてあじわえないともんくを言うし、小さな鳥はのどにキャンデーをつまらせて、せなかをたたいてもらわなくてはなりませんでした。で

も、それがやっとおわって、みんなは輪になってすわり、ネズミになにかもつと話をしてくれ、とせがみます。

「ご自分の話をしてくれるっておっしゃってましたよね」とアリス。「なぜ——『い』とか『ね』とかきらいなのかって」アリスはこここのころはひそひそ声で言いました。またネズミが怒つちやうんじやないかと思っただからです。

「ぼくのは、ながくてかなしいお話なのです」とネズミは、アリスのほうをむいてため息をつきました。

「たしかに、ながーい尾話おはなしですなえ」とアリスはネズミの尾っぽを見おろしました。「でも、どういふところがかなしいんですか」そして、ねずみがしゃべっているあいだも、それを考えてばかりいたので、アリスの頭のなかでは、お話はこんなかんじになりました。

「いえのなかで出く

わした犬がねずみに

いうことにや「ふた

りで裁判所にいこう、

おまえを訴追して

やるからさ。――

こいつて、いやと

はいわせない、

ぜひともこれは

裁判だだつて

けさはおれほん

となにもする

ことないから」

ねずみ犬にこ

たえて言う

には「だん

さん、陪審

も判事もい

ないそんな

裁判なぞ、

するだけ息

のむだです

がな」「お

れが判事で

おれが陪審」

とずるい老犬。

「おれが全

件さばき

つくし、

きさまに

死刑を

宣告し

てくれる。」

「ちゃんと聞いてないな！」とネズミは、きびしい調子でアリスに言いました。「なにを考えてる！」

「あらもうしわけありません」とアリスは、とつてもれいぎ正しく言いました。「たしか、くねくねの五番目あたりまでおっしやいましたっけ？」

「そんなことはゆってないぞ」とネズミは、怒ってきつい声でさげびます。

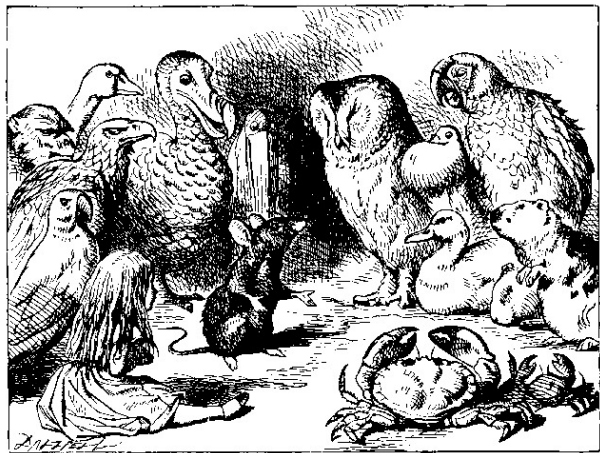
「結ゆってない！」アリスはいつでもおてつだいをしようとする子だったので、きよろきよろとあたりを見回しました。「じゃああたしがやりますから！」

「だれがそんなことするもんか」とネズミはたちあがって、むこうに歩きだしました。「ふざけたことばかりいって、ばかにしてる！」

「そんなつもりじゃなかったんです！」とかわいそうなアリスはうつ



たえました。「でも、あなたもそんな、すぐに怒らなくても！  
ねずみはへんじがわりに、うなってみせただけでした。」



「もどつてきて、お話を最後までできさせて！」アリスはうしろからよびかけて、ほかのみんなもそれに声をあわせました。「うん、たのむよ！」でも、ネズミは怒ったように首をふるだけで、もつと足ばやにいつてしまいます。

「いつちやうなんて、まあなんでしようねえ！」ねずみのすがたが、完全に見えなくなるとすぐ、インコがためいきをつきました。おばあちゃんガニが、ここぞとばかりにむすめにお説教です。「ほらごらん、いい子ですからね、あなたはぜったいカツカしちゃだめよ！」すると若いカニが、ちよつときつくこたえます。「うっさいわね、母さん。母さんにかかったら、しんぼうづよいカキでも頭にくるわよ！」

「ダイナがいたらいいのになあ、ぜったい」とアリスは、だれに言うともなく、声に出していいました。「そしたらすぐにつれてきてくれるのに」

「そしてあえておたずねしてよろしければ、そのダイナとはどなたですか？」とインコ。

アリスはうれしそうにこたえました。自分のペットの話は、どんなときでもしたくてたまらなかつたからです。「ダイナは、うちのねこの。それで、ねずみとりのうでまえは、思いもよらないくらいにすごいんですよ！ それと、小鳥をねらつたときなんか、お見せしたいくらい！ 小鳥なんて、見たしゆんかんにたべちゃうんです！」

この話で、一同は目に見えていろめきたちました。すぐにあわててそこをはなれる鳥もいます。おとしよりのカササギは、しんちようにみづくろいをはじめてこう言います。「そろそろ家にかえりませんとねえ。夜風がどうも、のどにきついもんでして」そしてカナリアがふるえる声で、子どもたちによびかけます。「ほらみんな、いらっしやい！ みんなとつくにおねむの時間よ！」なんだかんだと口実をつけて、みんなどこかへいつてしまい、やがてアリス一人がのこされてしまいました。

「ダイナのこと、いわなきやよかつた！」とアリスはゆううつにつぶやきました。「ここらだと、だれもあの子がすきじゃないみたい。ぜつ

たいに世界で一番いいねこなの！ ああかわいいダイナ、もう二度とおまえに会えないんじゃないかしら」そしてここで、かわいいそうなおアリスはまた泣き出しました。とつてもさびしくて、おちこんでいたからです。でもちよつとしたら、遠くのほうからピタピタいう小さな足音がきこえてきました。アリスはよろこんで顔をあげました。ネズミの気がかわって、おなはしを最後までしようとしてもどつてきたのかな、とすこし思ったのです。

## 四 うさぎ、小さなビルをおくりこむ

それはあの白うさぎで、ゆっくりトコトコともどつてきながら、困つたようにあたりを見まわしています。なにかなくしたみたいなんです。そして、こうつぶやいているのがきこえました。「公爵夫人が、公爵夫人が！　かわいい前足！　毛皮やらひげやら！　フェレットがフェレットであるくらい確実に、処刑されちゃうぞ！　まつたくいつたいどこでおとしたのかなあ？」アリスはすぐに、うさぎがさがしているのがせんと白い子ヤギ皮の手ぶくろだとおもいついて、親切な子らしく自分もさがしはじめましたが、どこにも見あたりません——池での一泳ぎでなにかもかわつちやつたみたいで、あのおつきなろうかは、ガラスのテーブルや小さなとびらともども、完全に消えうせていました。さがしまわっていると、すぐにうさぎがアリスに気がついて、怒つた声でこうよびかけました。「おやメリーアン、おまえはいつたい、こんなところでなにしてる？　いますぐに家に走ってかえって、手ぶくろ

とせんすをとってこい！」アリスはとつてもこわかったので、すぐにうさぎの指さすほうにかけだして、人ちがいです、と説明したりはしませんでした。

「女中とまちがえたのね」とはしりながらアリスは考えました。「あたしがだれだかわかったら、すぐくおどろくだろうな！ でもせんすと手ぶくろをとってこないと——みつければ、だけどね」こう言ったときに、きれいな小さいおうちにやってきました。そのとびらには、ぴかぴかのしんちゅう板がかかっていて「しろうさぎ」という名前がほつてありました。ノックせずに入つて、いそいで二かいへ急ぎました。そうしないとほんもののメリーアンに出くわして、せんすと手ぶくろを見つけるまでに家から追い出されるんじゃないかと、すごくこわかったのです。

「へんなの、うさぎのおつかいをしてるなんて！」とアリスはつぶやきました。「つぎはダイナにおつかいさせられるのかな！」そしてアリスは、そうなつたら何がおきるか想像をはじめました。「アリスお

じようさま！　すぐにいらして、おさんぽのしたくをなさい！』『すぐいく、保母さん！　でもネズミがにげださないようにみはつてないと』でも、ダイナがそんなふうの人に命令ししたら、おうちにいさせてもらえなくなると思うけど！』

このころには、きちんとした小さな部屋にたどりついていました。窓ぎわにテーブルがあつて、そこに（思ったとおりに）せんすと、小さな子ヤギ皮の手ぶくろが、二、三組おいてありました。せんすに手ぶくろを一組手にとつて、部屋を出ようとしたちようどそのとき、鏡の近くにたつている小さなびんが目にとまりました。こんどは「のんで」と書いてあるラベルはなかったのですが、それでもふたのコルクをとつて、くちびるにあてました。「なんでも食べたりのんだりすると、ぜつたいなーんかおもしろいことがおきるんだな。だから、このびんがなにをするか、ためしてみようつと。もつと大きくしてくれるといいんだけど。こんなちつぽけでいるのは、もうすっかりあきちゃったもん」たしかにそうになりました。しかも思ったよりずつとはやく。びんの



半分ものまないうちに、頭が天井におしつけられて、首がおれないようにするには、かがむしかありませんでした。アリスはすぐにびんをおいて、つぶやきます。「もうこのくらいでたくさん——もうこれいじょうは大きくならないといいけど——いまだつてもう戸口から出られない——あんなにのまなきやよかった！」

ざんねん！ そんなこといってもいまさらおそい！ アリスはどんな大きく、もつと大きくなつていつて、やがて床にひぎをつくしありません。もう一分もすると、これでも場所がなくなつてきて、片ひじをとびらにくつつけて、もう片うでは頭にまきつけて、よこになるみたいなかんじにしてみました。それでもまだ大きくなりつつづけて、窓から片うでをだして、片足はえんとつにつっこみました。そしてこうつぶやきます。「もうこれで、なにがおきてもどうしようもないわ。いったいどうなつちやうんだらう？」



アリスとしては運のいいことに、小さなまほうのびんは、もうききめがぜんぶ出つくして、それ以上は大きくなりませんでした。それでも、とてもいごこちは悪かったし、この部屋から二度と出られるみこみも、ぜったいになさそうだったので、アリスがあまりうれしくなかったのもあたりまえですね。

「おうちのほうがずっとよかったわ」かわいいそうなアリスは考えました。「おつきくなったりちっちゃくなったりばかりばかりかしじやなかったし、ネズミやうさぎにこきつかわれたりもしなかったし。あのうさぎの穴に入らなきやよかったと思うほど——でも——でもね——ちよつとおもしろいわよね、こういう生き方って！ あたし、いったいどうしちやったのかな、とか考えちゃうし！ おとぎばなしをよんだときには、そういうことはおこらないんだと思っただけ、いまはこうしてそのまん中にいるんだ！ あたしのことを本に書くべきよね、そうですとも！ だから大きくなったら、あたしが書こうつと——でも、いまもおつきくはなってるんだわ」とかなしそうにアリスはつけくわえ

ました。「すくなくともここでは、これ以上大きくなるよゆうはないわね」

「でもそしたら、あたしはいまよりぜんぜん歳もとらないってこと？それはある意味で、ほつとするわね——ぜつたいにおばあちゃんにならないなんて——でもすると——いつもお勉強しなきゃいけないってこと？ そんなのやーよ！」

「ああ、アリスのおばかさん」とアリスは自分でへんじをしました。「ここで勉強なんかできないでしょ。だって、あなた一人でもぎゅうぎゅうなのに、教科書のはいるとこなんか、ぜんぜんないわよ！」

そしてアリスはそのままつづけました。まずは片側になってしゃべり、それからその相手になってしゃべり、なんだかんだでかなり会話をつづけました。でも何分かして、外で声がしたので、やめてきき耳をたてました。

「メリーアン！ メリーアン！ いますぐ手ぶくろをもつてこい！」と声がいいます。そしてぴたぴたと小さな足音が、階段できこえまし

た。うさぎがさがしにきたな、とわかつたので、アリスはがたがたふるえて、それで家もゆれましたが、そこで自分がいまはうさぎの千倍も大きくて、ぜんぜんこわがらなくていいんだ、というのを思いだしました。

すぐにうさぎが戸口にやってきて、それをあげようと思いました。が、とびらは内がわにひらくようになっていて、アリスのひじがそれをしつかりおさえるかっこうになっていました。だもんで、やってもダメでした。アリスはうさぎがこうつぶやくのをききました。「じゃあまわりこんで、窓から入ってやる」

「そうはさせないわよ」とアリスは思つて、音のかんじでうさぎが窓のすぐ下まできたな、と思つたときに、いきなり手をひろげて宙をつかみました。なにもつかめませんでした。小さなひめいが聞こえて、たおれる音がして、そしてガラスのわれる音がして、だからたぶん、うさぎはキュウリの温室おんしつか、なんかそんなものの上にたおれたのかも、とアリスは思いました。



つぎに怒った声がします——うさぎのです——「パット！ パット！ どこだ？」するとアリスのきいたことのない声が「へいへいこつちですよ！ リンゴほりしてまつせ、せんせい！」

「リンゴほり、がきいてあきれる！」とうさぎは怒って言います。「こい！ こつから出るのてつだつてくれ！」（もつとガラスのわれる音）

「さてパット、あの窓にいるのは、ありやなんだね？」

「うでにきまつてますがな、せんせい！」（でもはつおんは、「しえんしええ」だったけど）

「うでだと、このほか。あんなでかいうでがあるか！ 窓いっぱいほどもあるだろう！」

「そりやそのとおりですけどね、せんせい、でもうではちがいありませんや」

「とにかく、あんなものがあそこにいちやいかん。おまえいつて、どかしてこい！」

ここでみんな、ずっとだまってしまいました。そしてきこえるのは、ときどきひそひそ声だけ。「うんにや、いやですよせんせい、だんじて、だんじて!」「いわれたとおりにせんか、このおくびようものが!」そしてアリスはついにまた手をひろげて、もう一回宙をつかんでみました。こんどは、小さなひめいが二つあがつて、またガラスのわれる音がしました。「ここらへんつて、キュウリの温室おんしつだらけなのねえ」とアリスは思いました。「さて、こんどはどうするつもりかしら? 窓からひっぱり出すつもりなら、ほんとにそれでうまくいけばいいんだけど。だってあたしだってもうここにはいたくないんだもん!」

しばらくは、なにもきこえないまま、まっています。やっと、小さな手おし車がたくさんガタガタいう音がきこえて、話しあっているたぐさんの声がします。ききとれたことばはこんなふうです。「もいつこのはしごはどこだ?——え、おれはかたつぽもつてきただけだよ/もいつこはビルだ——ビル! ここにもつてこいつて、ぼうず!——ほれ、こつちのかどに立てるんだよ——バカ、まずゆわえんだつて——そ



「ただじゃ半分しかとどかねえ——よーし！　それでなんとかなるっしょ／おい、なんかいったか——ほれビル、ロープのこつちのはしっこつかまえてくれ——屋根がもつかないあ——そこ、屋根石がゆるんでるから——ほーら落ちた！　ふせろ！」（おつきなガシャンという音）

——「おい、いまのだれがやった？——ビルだと思うね——だれがえんとつから入る？——えー、おれはいやだよ！　おまえやれつて！——えー、おれやですう！——ビルにいかせましょう——おいビル！　おやぶんが、おまえにえんとつ入れつて！」

「あらそう！　じゃあビルはえんとつから入つてこなきやならないつてわけ？　へえ、そうなんだ！」とアリスはつぶやきました。「まったく、みんななんでもビルにおしつつけるのね。あたしなら、どうあつてもビルの身にはなりたくないなあ。このだんろはたしかにせまいけども、ちよつとはけつとばせるんじゃないかなー！」

アリスがえんとつの足をできるだけ下までおろしてまっついていると、小さな動物（どんな動物かはわかりませんでした）が、えんとつのす

ぐ上のところで、カサコソとうごくのがきこえました。そこでアリスはこう思いました。「これがビルね」そしてするどく一発けりを入れて、どうなるかまちかまえました。



最初にきこえたのは、みんながいつせいに合唱する声です。「ビルがあがったあがったあ！」そしてうさぎの声がそこでしました——「おい、キヤツチしろ、しげみんとこのおまえ！」そしてしずかになって、それから口々に声がきこえます——「頭をもちあげろ——ブランデーだ——息をつまらせるな——どうだった、ぼうず！ なにがあつた？ なにもかも話してみろ！」

最後に、よわよわしい小さな、キイキイ声がきこえました（「あれがビルね」とアリスは思いました）「ええ、ぜんぜんわかんないんつつけど——いやもうけっこう、どうも。もうだいじょうぶつす——でもちよいと目がまわつちまつて話どころじゃ——わかつたのは、なんかがビックリばこみたいにせまつてきて、それでおいら、ロケットみたいにビューン、でして！」

「いやはやあんた、まつたくそのとおりだねえ」とみんな。

「これは家には火をつけるしかないぞ！」とうさぎの声がいきました。そこでアリスはおもいつきり声をはりあげました。「そんなことをした

ら、ダイナをけしかけてやるから！」

すぐに死んだみたいにしずかになつたので、アリスは考えました。「つぎはいつたいたいなにする気かしら！ ちよつとでも頭があれば、屋根をはずすはずだけど」一分かそこらで、また一回は動きまわりはじめ、うさぎの声がかきこえました。「手おし車いっばいくらいでいいな、手はじめに」

「手おし車いっばいのなんなの？」とアリスは思いました。でも、すぐにわかることになりました。というのも、つぎのしゅんかんに、小石が雨あられと窓からとびこんできて、いくつか顔にあたつたのです。「やめさせてやるわ」とアリスはつぶやいて、どなりました。「あんたたち、二度とやったらしようちしないわよ！」するとまた、死んだようにしずかになりました。

その小石が床にころがると、みんなケーキにかわっていったので、アリスはちよつとおどろきました。そしてすばらしいアイデアがひらめきました。「このケーキをひとつ食べれば、まちがいなく大きさがか

わるはずよ。それでこれ以上はぜったいおつきくなれないから、かならず小さくなる、と思う」

そこでケーキを一つのみこんでみると、すぐにちぢみだしたので、アリスはおおよろこびでした。とびらをとおれるくらい小さくなると、すぐに走ってそのおうちを出しました。外では、小さな動物や鳥たちがかなりたくさんまちかまえていました。かわいそうな小トカゲのビルが、そのまん中にいて、それを介抱（かいほう）しているモルモット二ひきの手で、びんからなにかをのませてもらっています。みんな、アリスがあらわれたとたんに、いつせいにかけよってきました。でもアリスはおもいつきり走って、やがて深い森にはいったのでひとまず安心。

「まずやんなきゃいけないのは、もとの大きさにもどることね」とアリスは、森のなかをさまよいながらつぶやきました。「そして二ばんめに、あのきれいなお庭へのいきかたを見つけることよ。それが一番いい計画だわ」

たしかに、すばらしい計画なのはまちがいないですし、とつても単純明快（たんじゅんめいかい）です。ただし一つだけ困ったことに、どこから手をつけていいやら、さっぱり見当もつかなかったのです。そしてそうやって木の間を不安そうにのぞいていると、小さくするとはいほえ声がして、アリスはあわてて上を見ました。

きよだいなワンちゃんが、おつきなまるい目でこつちをみおろし、まえ足をかたつぽ、おずおずとさしのべて、アリスにさわろうとしています。「まあかわいそうに」とアリスは、なだめるような声で言うとき、そのワンちゃんがおなかをすかせてたらどうしようとおもって、とてもこわかったのです。もしそうなら、どんなになだめても、たぶんすぐにアリスを食べちゃうはずでしょう。





自分でもなぜだかわからないまま、アリスは小さな棒つきれをひろつて、それをワンちゃんのようにさしました。するとワンちゃんは、四本足でぴよんととんで、うれしそうにほえると、棒つきれにかけよつてきて、それにかまけてるふりをします。そこでアリスは、おつきなイバラの後ろにかくれて、おしつぶされないようにしました。反対側から出てきたとたんに、ワンちゃんはもう一回、棒つきれにとびついて、それをおさえようとして頭からゴロゴロころがってしまいました。そしてアリスは、これはまるでばしや馬とあそんでるみたいで、いつふみつぶされるかわからないわ、と思いながら、またいばらのむこう側に走っていきました。そしてワンちゃんは、何度か棒つきれにみじかくとつしんをくりかえします。前にはほんのちよつとだけすすんで、それからおもいつきりがつて、そのあいだずっとワンワンとほえていました。そしてとうとう、ずっとはなれたところですからわりこみ、ベ口をだらりとたらし、息をハアハアいわせて、おつきな目を半分とじています。

これは、にげだすぜつこののチャンスだとおもったので、アリスはすぐにかけてだして、かなりつかれて息がきれるまで、走りつづけました。ワンちゃんのほえる声は、もう遠くでかすかにきこえるだけでした。

「でも、すつごくかわいいワンちゃんだったなあ」とアリスは考えながら、キンポウゲにもたれてやすんで、はっぱで自分をあおぎました。「芸を教えたかったなあ——あたしさえちゃんとした大ききだったら！ あ、そうだった！ あたし、また大きくならないと！ わすれるとこだったわ。さーて——どうすればいいのかな？ たぶんなんかしら、食べるかのむかすればいいんでしようね。でもなにを？ それが大問題だわ」

たしかにそれは大問題でした。なにを？ まわりをぐるつと見ても、花やはっぱは目に入りますが、いまのじょうたいで食べたりのんだりするのによさそうなものは、なんにも見あたりません。近くに、アリスと同じくらいのせたけのキノコがありました。アリスはその下をの

ぞいて、両側を見て、うら側も見てみたので、じゃあついでに、てっぺんになにがあるかも見てやろう、と思いつきました。

つま先立ちになって、キノコのふちから上をのぞくと、その目がおつきないもむしの目と、すぐにばつちりあつてしまいました。そいつはキノコのとっぺんにうで組みをしてすわり、しずかにながーい水パイプをすつていて、アリスも、それ以外のなにごとも、ぜんぜんどうでもいい、というようすでした。



## 五 いもむしの忠告

いもむしとアリスは、しばらくだまつておたがいを見つめていました。とうとういもむしが、口から水パイプをとって、めんどくさそうな、ねむたい声で呼びかけました。

「あんた、だれ？」といもむしが言います。

これは会話の出だしとしては、あんまり気乗りするものじゃありません。アリスは、ちよつともじもじしながら答えました。「あ、あ、あの、あまりよくわかんないんです、いまのところ——少なくとも、けさ起きたときには、自分がだれだったかはわかってたんですけど、でもそれからあたし、何回か変わったみたいで」

「そりやいったいどういうことだね」といもむしはきびしい声で申します。「自分の言いたいことも言えんのか！」

アリスは言いました。「はい、自分の言いたいことが言えないんです。だってあたし、自分じゃないんですもん、ね？」

「『ね?』 じゃない」といもむしが言います。

「これでもせいっぱいの説明なんです」とアリスはとてもしげ正しくこたえました。「なぜって、自分でもわけがわからないし、一日でこんなに大きさがいろいろかわると、すぐく頭がこんがらがるんです」

「がらないね」といもむし。

「まあ、あなたはそういうふうには感じてらっしゃらないかもしれないけれど、でもいずれサナギになって——だっていつかなるんですからね——それからチョウチョになったら、たぶんきみのような気分になると思うんですけど。思いません?」

「ちつとも」といもむし。

「じゃあまあ、あなたの感じかたはちがうかもしれないけれど、でもあたしとして言えるのは、あたしにはすぐきみのような感じだつてことです」

「あんた、か!」といもむしはバカにしたように言いました。「あん

た、だれ？」

これで話がふりだしにもどりました。アリスは、いもむしがずいぶんとみじかい返事しかしないので、ちよつと頭にきました。そこでむねをはつて、とてもおもおもしろく言いました。「思うんですけれど、あなたもご自分のことをまず話してくださいさらないと」

「どうして？」といもむし。

これまたなやましい質問です。そしてアリスはいい理由を考えつかなかったし、いもむしもずいぶんときげんがよくないようだったので、あつちにいくことにしました。

「もどつといで！」といもむしがうしろからよびかけました。「だいな話があるんじゃない！」

これはどうも、なかなか期待できそうです。そこでアリスは向きをかえると、またもどつてきました。

「カツカするな」といもむし。

「それだけ？」とアリスは、はらがたつのをひつしでおさえて言い

ました。

「いや」といもむし。

「じゃあまぢましようか、とアリスは思いました。ほかにすることもなかつたし、それにホントに聞くねうちのあることを言つてくれるかもしれないじゃないですか。何分か、いもむしはなにも言わずに水パイプをふかしているだけでしたが、とうとううで組みをといて、パイプを口からだすと言いました。「で、自分が変わったと思うんだって?」「ええ、どうもそうなんです。むかしまたいにいろんなことがおもいだせなくて——それに十分と同じ大きさでいられないんです!」

「おもいだせないって、どんなこと?」といもむし。

「ええ、『えらい小さなハチさん』を暗唱しようとしたんですけれど、ぜんぜんちがつたものになつちやつたんです!」アリスはゆううつな声でこたえました。

「『ウィリアム父さんお歳をめして』を暗唱してみい」といもむし。アリスはうでを組んで、暗唱をはじめました。





『ウイリアム父さんお歳をめして』

とお若い人が言いました。

『かみもとつくにまつ白だ。』

なのにかんこにさか立ちぎんまい――

そんなお歳でだいじょうぶ？』

ウイリアム父さん、息子にこたえ、

『わかい頃にはさかだちすると、』

脳みそはかいがこわかった。

こわれる脳などないとわかつたいまは、

なんどもなんどもやらいでか！』



『ウイリアム父さんお歳をめして』とお若い人、

『これはさつきも言つたけど。

そして異様なデブちんだ。

なのに戸口でばくてんを――

いつたいどういうわけですかい？』

老人、グレーの巻き毛をゆする。

『わかい頃にはこの軟膏で

手足をきちんととのえた。

一箱一シリングで買わんかね？』



『ウイリアム父さんお歳をめして』とお若い人、

『あごも弱つてあぶらみしかかめぬ

なのにガチヨウを骨、くちばしまでペロリ――

いつたいどうすりやそんなこと？』

父さんが言うことにや

『わかい頃には法律まなび

すべてを女房と口論三昧

それであごに筋肉ついて、それが一生保つたのよ』



『ウイリアム父さんお歳をめして』とお若い人、

『目だつて前より弱つたはずだ

なのに鼻のてっぺんにウナギをたてる——

いつたいなぜにそんなに器用？』

『質問三つこたえたら、もうたくさん』と

お父さん。『なにを気取つてやがるんだ！

日がなそんなのきいてられつか！

失せろ、さもなきや階段からけり落とす！』

「いまのはまちがつとるなあ」といもむしは申しました。

「完全には正しくありません、やっぱり」とアリスは、ちぢこまつて

言いました。「ことばがところどころで変わつちやつてます」

「最初つから最後まで、まちがいどおしじや」といもむしは決めつけるように言つて、また数分ほど沈黙ちんもくがつづきました。

まづいもむしが口をひらきました。



「どんな大きさになりたいね？」とそいつがたずねます。

「あ、大きさはべつにどうでもいいんです」とアリスはいそいでへんじをしました。「ただ、こんなにしょっちゅう大きさが変わるのがいやなだけなんです、ね？」

「『ね？』じゃない」といもむしが言います。

アリスはなにも言いませんでした。生まれてこのかた、こんなに茶々を入れられたのははじめてでした。だんだん頭にきはじめてるのがわかります。

「それでいまは満足なの？」といもむしが言いました。

「まあ、もしなんでしたら、もうちょっと大きくはなりたいです。身長8センチだと、ちょっとやりきれないんですもの」

「じつによろしい身長だぞ、それは！」といもむしは怒ったようにいいながら、まっすぐたちあがってみせました（ちようど身長8センチでした）。

「でもあたしはなれてないんですもん！」とかわいそうなアリスは、

あわれつぽくうったえました。そしてこう思いました。「まったくこの生き物たち、どうしてこうすぐに怒るんだろ！」

「いずれなれる」といもむしは、水パイプを口にもどして、またふかしはじめました。

アリスはこんどは、いもむしがまたしやべる気になるまで、じつとがまんしてまっています。一分かそこらすると、いもむしは水パイプを口からだして、一、二回あくびをすると、みぶるいしました。それからキノコをおりて、草のなかにはいこんでいってしまいました。そしてそのとき、あつきりこう言いました。「片側でせがのびるし、反対側でせがちぢむ」

「片側つて、なんの？ 反対側つて、なんの？」とアリスは、頭のなかで考えました。

「キノコの」といもむしが、まるでアリスがいまの質問を声にだしたかのように言いました。そしてつぎのしゅんかん、見えなくなっていました。

アリスは、しばらく考えこんでキノコをながめていました。どつちがその両側になるのか、わからなかったのです。キノコは完全にまん丸で、アリスはこれがとてもむずかしい問題だな、と思いました。でもとうとう、おもいつきキノコのまわりに両手をのばして、左右の手でそれぞれキノコのはしっこをむしりとりました。

「さて、これでどつちがどつちかな？」とアリスはつぶやき、右手のかけらをちよつとかじつて、どうなるかためしてみました。つぎのしゅんかん、あごの下にすごい一げきをくらってしまいました。あごが足にぶつかったのです！

いきなり変わったので、アリスはえらくおびえましたが、すごいきおいでちぢんでいたの、これはぼやぼやしてられない、と思いました。そこですぐに、もう片方をたべる作業にかかりました。なにせあごが足にぴったりおしつけられていて、ほとんど口があげられませんでした。でもなんとかやりとげて、左手のかけらをなんとかのみこみま

した。

\* \* \* \* \*  
「わーい、やっと頭が自由になった！」とアリスはうれしそうに  
いしましたが、それはいつしゅんでおどろきにかかりました。自分の  
たがどこにも見つからないのです。見おろしても見えるのは、すさま  
じいながさの首で、それはまるではるか下のほうにある緑のはっぱの  
海から、ツルみたいのにびています。

「あのみどりのものは、いったいぜんたいなにかしら？ それとあ  
たしのかたはいつたどこ？ それにかわいそうな手、どうして見え  
ないのよ！」こう言いながらも、アリスは手を動かしていました、  
でもなにも変わりません。ずっと遠くのみどりはっぱが、ちよつと  
ガサガサするだけです。

手を頭のほうにもつてくるのはぜつぼうてきだったので、頭のほう  
を手までおろそうとしてみました。するとうれしいことに、首はいろ

んな方向に、へビみたいにくらくくと曲がるじゃないですか。ちょうど首をゆうびにくねくねとうまく曲げて、はっぱの中にとびこもうとしました。そのはっぱは、実はさつきまでうろうろしていた森の木のでつぺんにすぎませんでした。するとそのとき、するどいシューっという音がして、アリスはあわてて顔をひっこめました。おつきなハトが顔にとびかかってきて、つばさでアリスをぼかすかなぐつています。

「へビめ！」とハトがさげびました。

「だれがへビよ！」とアリスは怒って言いました。「ほつといて！」  
「やつぱりへビじゃないか！」とハトはくりかえしましたが、こんどはちよつと元気がなくて、なんだか泣いてるみたいでした。「なにもかもためしてみたのに、こいつらどうしても気がすまないんだからね！」

「なんのお話だか、まるでさつぱり」とアリス。

「木の根つこもためして、川岸もためして、生けがきもためしてみたのに」とハトはアリスにおかまいなしにつづけます。「でもあのへビどもときたら、いつこうにお気にめさない！」

アリスはますますわけがわからなくなりましたが、ハトが話し終えるまでは、なにをいってもむだだな、と思いました。

「たまごをかえすだけでもいいかげん、たいへんだってのに」とハト。「おまげによるもひるも、へビがこないか見張つてなきやなんない！ この三週間、もうほんのちよつともねてないんだよ！」

「たいへんですねえ、おきのどく」アリスは、だんだんハトがなにをいいたいのかわかつてきました。

「それで、やっと森のなかで一番高い木に巣をつくつたばかりなのに」とハトの声があがつてかなきり声になりました。「やっとあいつらから解放（かいほう）されたと思つたときに、空からくねくねふつてくるんだから！ まったくへビときたら！」

「だからあ、へビじゃないって言つてるでしょう！」とアリス。「あ、あ、あたしは——」

「ふん、じゃああんた、いったいなんなのさ！」とハトが言います。「なんかでまかせ言おうとしてるわね！」

「あ、あたしは女の子よ」とアリスは、ちよつと自信なさそうに言いました。今日一日で自分がなんども変わったのを思いだしたからです。

「もうチトじょうずなウソついたらどうよ」とハトは、ものすごくバカにした口ぶりで言いました。「女の子なら、これまでたくさん見てきたけどね、そんな首したのは、一人だつて見たことないよ！ いやいや、あんたへびだよ。ごまかしたつてダメだい。するとなんだい、こんどはたまごを食べたことないなんて言い出すんだろう！」

「たまごなら食べたことありますとも」アリスはとつても正直な子だつたのです。「でも女の子だつて、へびと同じくらいたまごを食べるのよ」

「信じるもんですか」とハトが言います。「でももしそうなら、女の子だつてへびの一種さね。あたしに言えるのはそんだけだよ」

これはアリスにしてみれば、まったく新しい考え方でしたので、一分かそこらはなにも言えませんでしたので、それをとらえて、ハトはこうつけくわえました。「あんたがたまごをさがしてるんだ、そこん

「ここはまちがいないね。だったらあんたが女の子だろうとへびだろうと、あたしにやなんのちがいないもんだろが！」

「あたしにはかなりのちがいの！」とアリスはすぐに言いました。「でも、あいにくとたまごなんかさがしてないもん。それにさがしててもあんたのなんかいらないわ。なまたまごはきらいなもの」

「だったらさつきと失せな！」とハトはつつけんどんに言つて、また自分の巣にもどりました。アリスは、なんとかかんとか森のなかで身をかがめました。というのも首があちこちでえだにからまってばかりいたので、そのたびに止まってほどこかなくてはならなかったのです。しばらくして、自分がキノコのかけらをまだ手に持っていたのを思いだして、とつても気をつけて作業にかかり、まずは片方をかじつて、それから反対側を、というぐあいにして、ときどきは大きくなつて、ときどきは小さくなつて、やがてなんとかいつもの大きさにもどつたのでした。

まともな大ききくらしいになつたのは、ずいぶんひさしぶりでしたの



で、かえってかなりきみような感じがしました。でも数分でそれになれて、いつものように一人ごとをはじめました。「わーい、これで計画が半分たつせいだぞ！　こんなに変わるなんて、不思議よね！　毎分毎分、自分がなんになるのかちつともわかんない。でも、もとの大きさにはもどつた、と。つぎはあのきれいなお庭に入ることね——それっていったいどうやったらいいだろ？」こう言つたとき、いきなりひらけた場所に出て、そこに高さ120センチくらいの小さなおうちがありました。「だれが住んでるのか知らないけど」とアリスは思いました。「こんな大きさでちかよるわけにはいかないわね。だって死ぬほどこわがらせちゃうわ！」そこでまた右手のかけらをかじりはじめて、身長25センチになるまで、けっしておうちには近づきませんでした。



## 六　ぶたとコシヨウ

一分かそこら、アリスはそのままおうちをながめていて、つぎにどうしようかと思つていると、いきなりお仕着せすがたの召使めしつかいが、森からかけだしてきました——（それが召使めしつかいだと思つたのは、お仕着せをきていたからです。さもなければ、顔だけみたらそれはおさかなだと思つたはず）——そしてげんこつでそうぞうしくとびらをノックしました。それをあけたのは、これまたお仕着せすがたのべつの召使めしつかいで、丸い顔とおおきな目をしてカエルみたいです。そして召使めしつかい二人とも、おしろいをまぶしたかみの毛をしていて、それが頭一面でカールをまいています。いったいなんのさわぎかな、とアリスはすぐく知りたくなって、ちよつと森からしのび出ると、きき耳をたてました。おさかな召使めしつかいは、まずうでの下からおつきな手紙をとりだしました。自分とほとんど同じくらいおつきな手紙です。そしてこれを相手にわたしながら、おもおもしろい口ぶりでこう言いました。「公爵夫人ど

のへへ、女王さまより、クロケーのごしょうたいく」。カエル召使めしつかいは、同じようなおももしい口ぶりでくりかえしましたが、ことばの順番をちよつと変えました。「女王さまより、クロケーのごしょうたいく、公爵夫人どのへへ」

そして両方とも、ふかぶかとおじぎをして、するとカールがからまつてしまいました。

アリスはこれを見てゲラゲラわらつてしまつて、きこえるのがこわくて、森にかけもどつたほどでした。そしてつぎにまたのぞいてみると、おさかな召使めしつかいはいなくなつていて、もう片方が、とびら近くの地面にすわつて、ぽかーんと空を見あげています。

アリスはおずおずととびらのところへいつて、ノックしました。

「ノックなんかしてもむだよーん」と召使めしつかいが言いました。「わけ

は二つね。まずあたしがあんたと同じで、ドアのこつち側にいるもんねー。つぎに、中ではすんごいそうぞうしいもんで、だれもあんなのノックなんかきこえやしないのよーん」そしてたしかに、中ではまあ

とんでもない大そうどうになつてゐるようです——だれかずつと泣きわめいてはくしやみをして、しよつちゆうものすごいガシャーンというお皿かやかんがこなごなになつたみたいな音がするのです。

「おねがい、そうしたら、あたしはどうやって入ればいいのかしら」とアリス。

「ドアがあたしたちのあいだにあつたら、あんたがノックしても、ちよいとはいみがあるかもしれないけど」と召使めしつかいは、アリスにかまわず先をつづけます。「たとえば、あんたが中にいたら、ノックすれば、あたしが出したげられるんだけどねえ」こういいながら、かれはずつと空を見あげたまま、アリスはこれはどう考えても、失礼せんばんだと思ひました。「でも、しかたないのかもね」とアリスはつぶやきました。「だつてお目目があんな頭のすつごくつぺんにあるんですもん。でもそれにしても、きいたら返事くらいすればいいのに。——

どうやって入ればいいの？」と声にだしてアリスはくりかえしました。

召使めしつかいは言ひます。「あたしやここにすわつてゐるわあ、あしたになつ

でも——」

このときおうちのドアがあいて、おっきなお皿がシュルルツと、めしつかいの頭めがけてとんできました。そしてその鼻をかすめると、うしろの木にあたつてこなごなになりました。

「——ひよつとしてあさつてになつても」と召使めしつかいはまったく同じ口ぶりで、なにもおきなかつたみたいにつづけました。

「どうやって入れればいいの」とアリスは、もつと大きな声でいいました。

「そもそもあんた、入つていいのかしらねえ？」と召使めしつかい。「まずそれが問題、でしょう、ねえ」

たしかにそうです、まちがいはなく。でもアリスは、そんなこといわれたくありませんでした。「まったく頭にきちやうわよね、この生き物たちが口ごたえするのつて。キチガイになつちやいそうよ」

召使めしつかいは、このすきに、さつきのせりふをちよつと変えてくりかえそうと思つたようです。「あたしやここにすわつてるわあ、ずっとずつ

と、何日も何日もお」

「でもあたしはどうすればいいの？」とアリス。

「好きなように」と召使めしつかいは口ぶえをふきはじめました。

「ああ、こんなのと話をしてもしようがないわ」とアリスはぜつぼうして言いました。「完全なバカじゃないの！」そしてとびらをあけるとなかに入っていききました。

とびらはすぐに大きな台所につづいていて、そこははしからはしまでけむりまみれでした。公爵夫人はまん中にある三きやくいすにすわつて、赤ちゃんをあやしています。コックは火の上にかがみこんで、スープでいっぱいらしいおつきなおなべをかきまぜています。

「たしかにあのスープはコシヨウ入れすぎ」とアリスはつぶやきました。くしゃみをしながらつぶやくのもたいへんです。

それが空気にたくさんまじりすぎているのはたしかでした。公爵夫人でさえ、ときどきくしゃみをしています。そして赤ちゃんときたら、ちよつとも間をおかずに、くしゃみ、なき、わめきをくりかえしている

のでした。台所でくしゃみをしたのは、コックと、ろばたにすわっているおつきなねただけでした。ねこは、耳から耳までとどくくらいニヤニヤしています。





「あの、教えていただけませんか？」とアリスは、ちよつとびくびくしながらききました。自分から口をひらくのが、おぎょうぎのいいことかどうか、自信がなかったのです。「なぜこちらのねこは、あんなふうにニヤニヤわらうんでしょうか？」

「チエシヤねこだから」と公爵夫人。「そのせいだよ。ぶた！」

最後のひとは、いきなりすごいあらつぽさだったので、アリスはほんとにとびあがつてしまいました。が、すぐにそれが赤ちゃんに言ったせりふで、アリスに言ったのではないのがわかりました。そこでゆうきをだして、またきいてみました――

「チエシヤねこがいつもニヤニヤわらうとは知らなかったです。と  
いうか、そもそもねこがニヤニヤわらうことができるつて知りませんでした」

「みんなできるよ。で、ほとんどみんなしてる」と公爵夫人。

「あたしは、してるねこは見たことないんです」とアリスはれいぎ正しく言いました。やっと会話ができたので、とてもうれしかったのです。

「あんたはもの知らずだからね。まちがいないよ」と公爵夫人。

アリスはこの意見の調子がぜんぜん気にいらなかったので、なにかべつ の話題にしたほうがいいな、とおもいました。なにか思いつこうとしてゐるあいだ、コックはスープのおなべを火からおろして、すぐにまわりのものを手あたりしだいに、公爵夫人と赤ちやんにむかつてなげつけるしごとにとりかかりました——まずは火かきどうぐ。つづいて小皿、中皿、大皿の雨あられ。公爵夫人は、それがあたつてもまったく無視していました。そして赤ちやんは、もともとすさまじくわめいていたので、おさらがあたつていたのかどうか、ぜんぜんわかりません。

「ああ、おねがいだから自分のやることに気をつけてよ！」とアリスはさげんで、怒つてかんしゃくをおこして、ぴよんぴよんとびはねました。「ほら、あのかわいいお鼻があんなことに」ちようど、とんでもなくでつかなソース皿が赤ちやんの鼻の近くをとんでいつて、あやうくそれをもぎとるところでした。

「みんなが自分のやることだけ気をつけて、ひとごとに口出ししなけりや、この世はいまよりずっとずっときつさと動くこつたらうよ」と公爵夫人が、あらっぽいうなり声をあげました。

「それはぜったいに困ったことですよね」とアリスは、ちしきをひけらかすチャンスができて、とてもうれしく思いました。「昼と夜がかわって、すぐくたいへんなことになるはずですよ！　つまりですね、地球は一回まわるのに24時間かかって、昼と夜でおのおの——」

「おのといえげ」と公爵夫人。「この娘の頭をちよんぎつちまいな！」アリスはいささか心配そうにコックのほうを見ました。コックがいまのを本気にしたかな、と思つたのです。でもコックはスープをかきまぜるのにいそがしくて、きいていないようでしたので、アリスは続けました。「一日つて24時間、だつたと思うんですけど。それとも12でしたっけ？　あたし——」

「あら、あたしになんかきかないですよ」と公爵夫人。「あたしや数字はぜんぜんにがてなんだからね！」それからまた子どもをあやしはじ

め、いつしよになんだか子もり歌みたいなものをつたいだしました。一行うたうごとに、赤ちゃんをすさまじくゆさぶっています。

「ガキにはあらつぽい口きいて

くしやみしやがったらぶんなぐれ

どうせいやがらせでするくしやみ

こつちが怒るの知ってやがる」

### 合唱

(ここでコックとあかちゃんもいつしよに) …—

「わあ！ わあ！ わあ！」

公爵夫人は、歌の二番をうたいながら、赤ちゃんをらんぼうにポンポン投げています。そしてかわいそうな赤ちゃんがすごくわめくので、アリスはほとんど歌がきこえませんでした——

「ガキにはきつい口をきく

くしゃみをしたらぶんなぐる

勝手なときにはコシヨウでも

しつかりきちんと味わうくせに！」

### 合唱

「わあ！ わあ！ わあ！」

「ほれ、なんならあんたにもちよつとあやさせてやるよ！」と言いながら、公爵夫人は赤ちゃんを投げつけてよこしました。「あたしやちよつと、女王さまとクロケーをするんでじゅんびがあるからね」そしてさつさと部屋を出てしまいました。コックは、その出ぎわにフライパンをなげつけましたが、おいしいところではずれました。

アリスはずいぶんくろうして赤ちゃんをつかまえました。すつごくへんなかつこうの生き物で、あっちこつちに手足をつきだしてばかり

いたからです。「ヒトデみたい」とアリスは思いました。かわいいそう  
な子は、つかまえたときには蒸気機関車じょうききかんしゃみたいみたい、フガフガ言っ  
ていて、しかもからだをまげたりのはいたりするので、そういうのが  
ぜんぶあわさって、最初の一分かそこらは、かかえておくだけでせい  
いっぱいでした。

それをまともにあやすやり方がわかったので（ちなみに、それは赤  
ちゃんをひねって、いわばゆわえちやって、そして右耳と左足をしっ  
かりもって、それがほどけないようにしてやることだったんだけど）、  
アリスはすぐにそれを外につれだしました。「もしあたしがこの子を  
いっしょにつれてかないと、ぜったいに一日かそこらでころされちゃ  
うものね。そんなところのこしてつたら、殺人でしょう？」アリス  
は最後のところを声に出していました。すると生き物は、返事のか  
わりに鼻をならしました（このころには、くしゃみはやんでいたの  
です）。「鼻をならしちゃダメ。意見を言うのにぜんぜんちゃんとしたや  
りかたじゃないわよ」





赤ちゃんはまた鼻をならして、アリスはとつても心配になって、そのかおをのぞきこんでどうかしたのか見ました。まちがいなくこの子は、とつても上向きの鼻をしていて、人の鼻よりはブタの鼻ヅラみたいでした。それと、赤ちゃんにしては目がすつごく小さくなつてきます。ぜんぶあわせると、アリスとしてはこの子のようすがぜんぜん気に入りません。「でも、しゃくりあげただけかも」と思つて目をのぞきこみ、涙がないかしらべました。

いいえ、涙はありません。「いい子だからね、ぶたになつちやうなら、もうかまつてあげませんからね！」とアリスはまじめに言いました。かわいそうな生き物は、またしゃくりあげます（あるいは鼻をならしたのか、どつちかはぜんぜんわかりません）。そして二人は、しばらくだまつたままでいました。

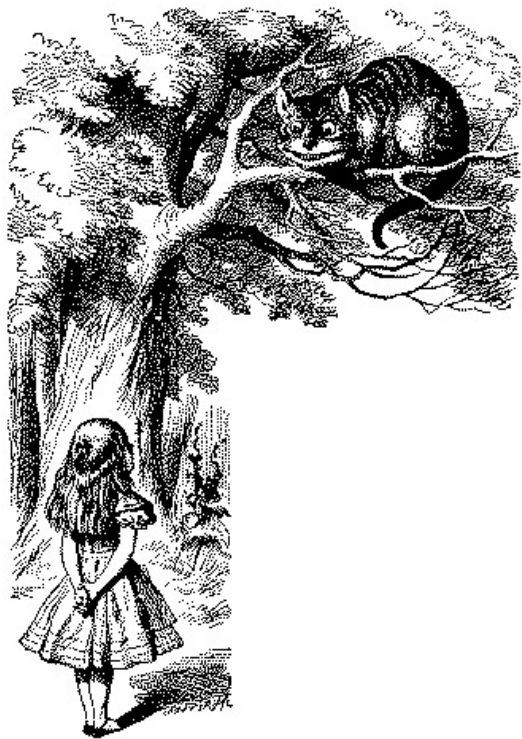
「でもこの生き物をおうちにつれてかえつたら、どうしてやつたらいいんだろう」とアリスがちょうど思つたときに、そいつがまた鼻をならしました。それがすごくきょうれつで、アリスはびっくりしてそ

の顔をのぞきこみました。こんどは、もうまちがえようがありません。それはまったくもつてぶたそのものでした。だから、これ以上だっこしてやるのは、じつにばかげてる、と思いました。

そこでアリスはその小さな生き物を下におろし、するとしずかにトコトコと森にむかつていったので、ずいぶんホツとしました。「あれでおつきくなったら、しぬほどみつともない子どもになったでしょうね。でもぶたとしてなら、なかなかハンサムじゃないかな、と思う」そしてアリスは、知り合いのなかで、ぶたになったほうがうまくやっていけそうな子たちを思いうかべてみました。そして「もしちゃんとあの子たちを変えるほうさえわかれば——」とちようどいったとき、何メートルか先の木の太い大えだに、あのチェシヤねこがすわっていたので、アリスはちよつとぎよつとしました。

ねこは、アリスを見てもニヤニヤしただけです。わるいねこではなさそうね、とアリスは思いました。が、とつてもながいツメに、とつてもたくさんの歯をしていたので、ちゃんと失礼のないようにしない

と、  
と思いました。



「チェシヤにゃんこちゃん」とアリスは、ちよつとおずおずときりだしました。そういうよび名を気に入ってくれるかどうか、さつぱりわからなかつたからです。でも、ねこはニヤニヤ笑いをもつとニツタリさせただけでした。「わーい、いまのところきげんがいいみたい」とアリスは思つて、先をつづけました。「おねがい、教えてちょうだい、あたしはここからどつちへいったらいいのかしら」

「それはかなり、あんたがどこへいきたいかによるなあ」とねこ。

「どこでもいいんですけど——」とアリス。

「ならどつちへいつてもかんけないじゃない」とねこ。

「でもどつかへはつきたいんです」とアリスは、説明するようにつべくわえました。

「ああ、そりやどつかへはつくよ、まちががなく。たつぷり歩けばね」

アリスは、これはたしかにそのとおりだと思つたので、べつの質問をしてみました。「ここらへんには、どんな人がすんでるんですか？」

「あっちの方向には」とねこは、右のまえ足をふりまわしました。帽子屋がすんです。それとあっちの方向には」ともうかたほうのまえ足をふりまわします。「三月うきぎがすんです。好きなほうをたずねるといいよ。どっちもキチガイだけど」

「でも、キチガイのところなんかいきたくない」とアリスはのべます。「そいつはどうしようもないよ。ここらじゃみんなキチガイだもん。ぼくもキチガイ、あんたもキチガイ」

「どうしてあたしがキチガイなんですか？」とアリス。

「ぜつたいそうだよ。そうでなきやここにはこない」とねこ。

アリスは、そんなのなんのしょうめいにもなっていないとおもいました。でも、先をつづけけます。「じゃあ、あなたはどのようにしてキチガイなの？」

「まずだね、犬はキチガイじゃない。それはいい？」

「まあそうね」とアリス

「すると、だ。犬は怒るとうなつて、うれしいとしつぽをふるね。さ

て、ぼくはうれいしいうなつて、怒るとしつぽをふる。よつて、ぼくはキチガイ」

「それはうなるんじゃないやなくて、のどをならしてゐるつていうのよ」とアリス。

「お好きなように」とねこ。「女王さまときょう、クロケーをするの？」

「したいのはやまやまだけど。でもまだしようたいされてないの」「そこで会おうね」といつて、ねこは消えました。

アリスはたいしておどろきませんでした。へんてこなことがおきるのに、もうなれちゃったからです。そしてねこがいたところを見てみると、いきなりまたあらわれました。

「ところでちなみに、赤ちゃんはどうなつた？」とねこ。「きくのわすれるとこだった」

「ぶたになつちやつた」とアリスは、ねこがふつうのやりかたでもどつてきたのとかわらない声で、しずかにいいました。

「だろうとおもった」ねこは、また消えました。

アリスはちよつとまってみました。ねこがまたでてくるかも、とおもったのです。が、でてこなかったので、一分かそこらしてから、三月うさぎのすんでいるはずのほうに歩きだしました。「帽子屋さんならみたことあるし、三月うさぎのほうがおもしろいわね。それにいまは五月だから、そんなすぐくキチガイでないかもしれない——三月ほどには」——こういうながら、ふと目をあげると、またねこがいて木のえだにすわっています。

「ぶたつて言った、それともぶた？」とねこ。

「ぶた。それと、そんなにいきなり出たり消えたりしないでくれる？  
くらくらしちやうから」

「はいはい」とねこ。そしてこんどは、とてもゆつくり消えていきました。しつぽの先からはじめて、最後はニヤニヤわらい。ニヤニヤわらいは、ねこのほかのところが消えてからも、しばらくのこつていました。





アリスは思いました。「あらま！ ニヤニヤわらいなしのねこならよく見かけるけれど、でもねこなしのニヤニヤわらいとはね！ 生まれて見た中で、一番へんてこなしろものだわ！」

ほんのしばらく歩くと、三月うさぎのおうちが見えてきました。まちがいないと思ったのは、えんとつが耳のかっこうをしていて、屋根が毛皮でふいてあったからです。あんまりおつきなおうちだったもので、左手のキノコをちよつとかじつて、身長60センチくらいになつてからでないと、近づきたくありませんでした。それでもなお、びくびくしながらちかづいて、その間もこう思っていました。「やつぱりすごくキチガイかも！ やつぱり帽子屋さんのほうに会いにいけばよかつたかなあ！」

## 七 キチガイお茶会

おうちのまえの木の下には、テーブルが出ていました。そして三月うさぎと帽子屋さんが、そこでお茶してます。ヤマネがそのあいだで、ぐつすりねてました。二人はそれをクツションがわりにつかつて、ひじをヤマネにのせてその頭ごしにしゃべっています。「ヤマネはすごくいごこちわるそう。でも、ねてるから、気にしないか」とアリスは思いました。

テーブルはとてもおっきいのに、三名はそのかどっこ一つにかたまっています。「満員、満員！」とアリスがきたのを見て、みんなさげびました。「どこが満員よ、いっぱいあいてるじゃない！」とアリスは怒って、そしてテーブルのはしのおつきなひじかけつきのいすにすわりました。

「ワインはいかが」と三月うさぎが親切そうに言います。

アリスはテーブル中をみまわしましたが、そこにはお茶しかのつて

ません。「ワインなんかみあたらないけど」とアリス。

「だってないもん」と三月うさぎ。

「じゃあ、それをすすめるなんて失礼じゃないのよ」とアリスははらたてました。

「しよたいもなしに勝手にすわって、あんたこそ失礼だよ」と三月うさぎ。



「あなたのテーブルについて知らなかったからよ」とアリス。「三人よりずっとたくさんの用意がしてあるじゃない」

「かみの毛、切ったほうがいいよ」帽子屋さんはアリスをすぐくものめずらしそうに、ずいぶんながいことジロジロ見ていたのですが、はじめて言ったのがこれでした。

「人のこととやかく言っちゃいけないのよ」とアリスは、ちよつときびしく言いました。「すつごくぶきほうなのよ」

帽子屋さんは、これをきいて目だまをぎよろりとむきました。が、言ったのはこれだけでした。「大ガラスが書きものづくえと似ているのはな―ぜだ？」

「わーい、これでおもしろくなるぞ！ なぞなぞをはじめてくれてうれしいな」とアリスは思いました。そして「それならわかると思う」と声に出してつけくわえました。

「つまり、そのこたえがわかると思うって意味？」と三月うさぎ。

「そのとおり」とアリス。

「そんなら、意味どおりのことを言えよ」と三月うさぎはつづけま  
す。

「言ってるわよ」アリスはすぐこたえました。「すくなくとも——す  
くなくとも、言つたとおりのことは意味してるわ——同じことでしょ」  
「なにが同じなもんか」と帽子屋さん。「それじゃあ『見たものを食  
べる』つてのと『食べるものを見る』つてのが同じことだと言ってる  
みたいなものだ」

三月うさぎも追加します。「『もらえるものは好きだ』つてのと『好  
きなものもらえる』つてのが同じだ、みたいな！」

ヤマネもつけくわえました。まるでねごとみたいです。「それつ  
て、『ねるときにいきをする』と『いきをするときにねる』が同じだ、  
みたいな！」

「おまえのばあいは同じだろうが」と帽子さんがいつて、ここで  
お話がとぎれて、みんなしばらくくなくにもいわずにすわっていました。  
アリスは、大ガラスと書きものづくえについて、ありったけ思いだそ

うとしましたが、大して出てきません。

帽子屋さんが、まっ先にちんもくをやぶりました。「きょうつて何日？」とアリスにききます。ポケットから時計をとりだして、それを困ったように見ながら、ときどきふつたりしては、耳にあてています。

アリスはちよつと考えてから言いました。「よっか四日」

「ふっか二日もくるつてる！」と帽子屋さんはためいきをつきました。そして、怒つて三月うさぎをにらみつけました。「だからバターじゃダメだつて言ったじゃねえか！」

「最高のバターだつたんだぜ」と三月うさぎは力なくこたえました。「おう、でもパンくずがいつしよに入つちまつたにちげえねえ」と帽子屋さんはもんくをたれます。「おめえがパンきりナイフなんかつかいやがるから」

三月うさぎは時計をうけとると、しよんぼりとそれをながめます。それからそれを自分のお茶にひたしてみてから、またながめました。でも、最初のせりふ以上のものはおもいつきませんでした。「最高のバ



ターだったんだぜ」

アリスは興味（きょうみ）しんしんで、そのかたごしにながめていました。「ずいぶんへんな時計ね！ 何日かわかるけど、何時かはわからないなんて！」

「そんなのわかつてもしかろうがねえだろ」と帽子屋さん。「あなたの時計は、いまが何年かわかるのかい、え？」

「もちろんわかんないけど」とアリスは自信たつぷりにこたえます。「でもそれは、年つてかなりずっと長いことおんなじままだからよ」

「おれの場合もまさにおんなじこった」と帽子屋さん。

アリスはものすごく頭がこんがらがってきました。帽子屋さんの言ったことは、まるでなんの意味もないようですが、でもちゃんと文にはなってるのです。「どうもよくわからないみたいです」とアリスは、できただけでいねいに言いました。

「ヤマネのやろう、またねてやがる」と帽子屋さんは、ヤマネの鼻ヅラにちよつとあついお茶をかけました。

ヤマネはあわてて頭をふると、目をあけずにいました。「いや、まったくまったく。おれもそう言おうと思つてたところ」

「なぞなぞはわかつたかよ」と帽子屋さんは、またアリスに話しかけました。

「だめ、こうさん。こたえはなに？」とアリスはこたえました。

「さつぱり見当もつかない」と帽子屋さん。

「わしも」と三月うさぎ。

アリスはうんざりしてため息をつきました。「もう少しましに時間をつかつたら？ それを、答のないなぞなぞなんか聞いて、むだにしたりして」

「おれくらい時間と仲がよけりや、それをむだにするなんて言い方はせんね。やつだよ」

「なんのことやらさつぱり」とアリス。

「そりやあんたにやわかるめえよ！」と帽子屋さんは、バカにしたようにみえをきりました。「どうせ、時間と口きいたこともねえんだ

ろ！」

「ないかも」とアリスはしんちように答えます。「でも、音楽を教わるときには、こうやって時間をきざむわよ」

「おう、それだそれ、そのせいだよ」と帽子屋さん。「やつだつてきざまれたかねえやな。いいか、やつとうまいことやりさえすりやあ、やつは時計がらみのことなら、ほとんどなんでも塩梅あんばいしてくれらあね。たとえば、朝の9時で、ちようど授業の始まる時間だ。でもそこで時間かんじにちよいと耳うちすれば、いつしゅんで時間がグルグルと！ さあ午後一時半、ばんごはんの時間だよ！」

（「いまがそうならねえ」と二月うさぎは小声でつぶやいた。）

「そうなつたら、なかなかすごいでしょうねえ、たしかに」とアリスは、考えぶかげにいました。「でもそしたら——あたしはまだおなかがすいてないわけよねえ」

「最初のうちは、そうかもしんねえけど」と帽子さんが言いました。「でも、いつまでも好きなだけ一時半にしとけるんだぜ」

「あなた、そんなことしてくらしてるんだ」とアリス。

帽子屋さんは、かなしそうに頭をふります。「おれはちがうよ。おれと時間は、こないだの三月に口論してさあ——ちようどあいつがキチガイになるちよつと前だったけどね——」（と三月うさぎを茶さじで指さします）「——ハートの女王さまがやった大コンサートがあつて、おれもうたうことになつたんよ」

「きらきらコウモリよ

おそらで謀<sup>はか</sup>る！」

知ってるだろ、この歌？」

「なんかそんなようなのは、きいたことある」とアリス。

帽子屋さんはつづけけます。「それでさ、こんなふうにつづくじやないか

「世界のうえを

お盆ほんの飛翔ひしょう

「きらきら——」



© 1911-12

ここでヤマネがみぶるいして、ねむりながらうたいはじめました。「きらきら、きらきら、きらきら——」そしてこれをいつまでもつづけたので、みんなでつねってなんとかやめさせました。

「うん、それでおれが歌の一番もうたいおわらないうちに、女王さんがとびあがつて、ぎやあすか言いやがつてさ、『ごやつ、ひょうしの時間をバラバラにしておるではないか！ 首をちよん切れ！』」

「まあなんてひどいざんこくな！」とアリスはさげびます。

「で、それからずっと、時間のやつつたら、バラバラにされたの根にもつて、おれのたのみをいっこうにきいてくれやしねえんだ。だからいまじゃずっとこの時のまんまよ」

急にアリスはひらめきました。「じゃあそれで、お茶のお道具がこんなに出てるのね？」

「そ、そゆこと」と帽子屋さんのはためいきをつきました。「いつでもお茶の時間で、あいまに洗ってるひまがないのよ」

「じゃあ、どんどんずれてくわけ」とアリス。

「ごめいとう。使いおわるとだんだんずれる」

「でも最初のところにもどつてきたらどうなるの？」アリスはあえてきいてみました。

三月うさぎがわりこみました。「そろそろ話題を変えようぜ。もうあきてきたよ。このおじょうちゃんがお話をしてくれるのに一票」

「悪いんですけど、なにも知らないの」とアリスは、この提案になりびつくりして言いました。

「じゃあヤマネにやらせろ！」と二人はさげびました。「おいヤマネ、起きろつてば！」そして両側から同時につねりました。

ヤマネはゆつくり目をあげました。「ねてないよお」と、しゃがれたよわよわしい声で言います。「おまえたちのせりふ、ぜーんぶきいてたよお」

「お話してくれよう！」と三月うさぎ。

「ええ、おねがい！」とアリスもたのみます。

帽子屋さんが言います。「それと、さっさとやれよ。さもねえと、お



わんないうちにねちまうだろ、おめえ」

ヤマネはあわててはじめました。「むかしむかし、三人姉妹がいなかに住んでおりました。なまえは、エルシー、レイシー、ティリー。そしてこのいなか姉妹は、井戸のそこに住んでいまして——」

「なにを食べてたの？」アリスは、食べたりのんだりする質問に、いつもごく興味きょうみがあつたのです。

「とうみつを」とヤマネは、一分かそこら考えこんでからいいました。

「そんなこと、できるはずないわ」アリスはしずかにもうしました。「だって病気になつちやうもの」

「まさにそのとおり」とヤマネ。「とつても病気でした」

アリスは、そんなとんでもない生き方つてどんなものか、想像してみようとしました。でもなぞが多すぎたので、つづけました。「でも、なんだって井戸のそこになんかに住んでたの？」

「茶あもつとのみなよ」と三月うさぎが、とつてもねっしんにアリ

スにすすめました。

「まだなにものんでないのよ。だからもつとなんてのめないわ」アリスはむつと返事をします。

「ちよつとはのめない、だろ。なにものんでないなら、ゼロよりもつとのむなんてかんだんだあ」と帽子屋さん。

「だれもあんたになんかきいてないわ」とアリス。

「ひとのこととやかく言うなつてつたの、だれだつけねえ」と帽子屋さんは勝ちほこつてききました。

アリスはなんとこたえていいかわかりませんでした。だからお茶とバターパンをちよつと口にして、それからヤマネにむかつて質問をくりかえしました。「その子たち、なんで井戸のそこに住んでたの？」

ヤマネはまた一分かそこら、それについて考えてから言いました。「とうみつ井戸だったのです」

「そんなものあるわけないでしょう！」アリスは怒り狂つて言いかけましたが、帽子屋さんと三月うさぎが「シイッ！ シイッ」と言っ

て、そしてヤマネはきつい口ぶりで言いました。「れいぎ正しくできないのなら、話のつづきはあんたがやってくれよ」

「いえおねがい、つづけてください！」アリスはつつましく言いました。「もうじやまはしませんから。とうみつ井戸も、ひとつくらいならあるかも」

「ひとつくらい、だと！」ヤマネはおもしろくなさそうです。でも、先をつづけることには同意してくれました。「そこでこのいなか姉妹三人は——お絵かきをならってました。ほら——」

「なにをかけたの？」とアリスは、やくそくをすっかりわすれてきます。

「とうみつ」とヤマネは、こんどはぜんぜん考えずにいいました。

「きれいなお茶わんがほしーぜ」と帽子屋さんがわりこみます。「みんな一つずつずれる」

そういいながら帽子屋さんが動いて、ヤマネがつづきました。三月うさぎがヤマネのせきにうごいて、アリスはいいやいやながら三月うさ

ぎのせきにつきました。動いてちよつとでもとくをしたのは、帽子屋さんだけです。そしてアリスはさつきよりずっと悪いせきになりました。三月うさぎが、ちょうどミルク入れをお皿にひっくりかえしたばかりのせきだったからです。

アリスは二度とヤマネのきげんをそこねたくなかったので、とても用心してきりだしました。「でも、わかんないんですけど。そのいなか姉妹って、どこからとうみつをかいいたの？」

「水の井戸から水をかいだすのとおんなじだよ」と帽子屋さん。「だからとうみつ井戸からだってとうみつをかいだせるだろが——このバーカ」

「でも、そのいなか姉妹たちって、井戸の中にいたんでしょ？」アリスは、いま帽子屋さんのいったことは、むしろすることにしてヤマネにききました。

「そうそう」とヤマネ。「だから井中いなか姉妹」

このこたえに、かわいそうなアリスはとてもまごついてしまって、

ヤマネがつづけてもしばらくはわりこみませんでした。

ヤマネは、あくびをして目をこすりながらつづけます。「この子たちはお絵かきをならつていて、いろんなものをかきました——まみむめもではじまるものならなんでも——」

「どうしてまみむめも？」とアリス。

「なんかいけない？」と三月うさぎ。

アリスはだまりました。

ヤマネはこのあたりでそろそろ目を閉じて、うつらうつらしはじめていましたが、帽子屋さんにつねられて、またちよつとひめいをあげてとびおきて、先をつづけました。「——まみむめもではじまるものならなんでも——たとえば『まんじゅう』とか『みらい』とか、『むずかし』とか『めんどう』とか、『もう』とか——ほら、『もうたくさん』ついでうでしょ——あんた、もうの絵なんて見たことある？」

「さてさて、そう言われてもあたしだってそんなこと」とアリスは、頭がすぐくこんがらがって言いました。「いままで考えたこともないし

「じゃあだまっつてな」と帽子屋さん。

この無礼さかげんには、もうアリスはがまんできませんでした。思いつきり顔をしかめて立ちあがり、歩きさつていきました。ヤマネはすぐになてしまい、ほかの二人はどつちも、アリスがいつちやつてもまるで気にしませんでした。アリスのほうは、一、二回ほどふりかえつて、もどつてこいと言つてくれないかな、とちよつと思つたりもしたのですが。最後にふりかえつたとき、二人はヤマネをお茶のポットにおしこもうとしていました。



「どうしたって、もうにどとあそこにはもどりませんからね！」とアリスは、森の中の道をすすみながら言いました。「生まれてから出たなかで、いっちなばかばかしいお茶会だったわ！」

こう言ったとき、木の一つに中に入るとびらがついていっているのに気がつきました。「あらへんなの。でも今日って、なにもかも変よね。だからこれも入っちゃおう」そして入ってみました。

きがつくと、アリスはまたもやあのながい廊下において、近くにはあの小さなガラスのテーブルもあります。「さて、こんどはもつとうまくやるわ」とつぶやいて、まずは小さな金色の鍵をとって、お庭につづくとびらの鍵をあけました。それからキノコをかじりだして（かけらをポケットに入れてあったのです）、身のたけ $\infty$ センチくらいにしました。それから小さな通路を歩いてぬけます。そしてやつと——ついにあのきれいなお庭にやってきて、あのまばゆい花だんやつめたいふん水のあいだを歩いているのでした。





## 八 女王さまのクローケ―場

お庭の入り口には、おおきなバラの木が立っていました。そこにさ  
いているバラは白でしたが、そこに庭師が三人いて、それをいつしよ  
うけんめい赤くぬっていました。アリスは、これはずいぶん変わった  
ことをしていると思つて、もつとよく見ようと近くによつてみました。  
ちようど近くにきたら、一人がこう言つてるところでした。「おい五、  
気をつけろ！ おれをこんなペンキだらけにしやがつて！」

「しようがないだろ」と五は、きつい口ぶりで言いました。「七がひ  
じを押しただよ」

すると七が顔をあげていいました。「そうそうその調子、いつも人の  
せいにしてりやいいよ」

「おまえはしやべるんじゃない！」と五。「女王さまがついきのう  
も、おまえの首をちよん切るべきだつて言つてたぞ！」

「どうして？」と最初にしやべつたのが言います。

「二！ おまえにはかんけいない！」と七。

「かんけい、大ありだよ！」と五。「だから話しちゃうもんね——  
コックに、タマネギとまちがってチューリップの球根をもつてったか  
らだよ」

七はペンキのはけをふりおろして、ちょうど「まあだまつてきいて  
りやいい気になりやがって——」と言いかけたところで、たまたまア  
リスが目に入りいましたので、いきなり身をとりにくろつています。  
ほかの二人も見まわして、みんなふかふかとおじぎをしました。

「ちよつとうかがいますけど」とアリスは、こわごわきいてみまし  
た。「なぜそのバラにペンキをぬつてるんですか？」

五と七はなにもいわずに、二のほうを見ます。二は、小さな声でこ  
うきりだしました。「ええ、なぜかといいますとですね、おじようさ  
ん、ここにあるのは、ほんとは赤いバラの木のはずだったんですがね、  
あつしらがまちがえて白いのをうえちまつたんですわ。それを女王さ  
まがめつけたら、みーんなくびをちよん切られちまいますからね。だ

もんでおじょうさん、あつしらせいいっぱい、女王さまがおいでになるまえに——」このとき、お庭のむこうを心配そうに見ていた五が声をあげました。「女王さままだ！ 女王さままだ！」そして庭師三名は、すぐに顔を下にはいつくばつてしまいました。足音がたくさんきこえて、アリスは女王さまが見たかつたのでふりむきました。

まずはこん棒を持った兵隊さんが十名。みんな庭師三名とおんなじかたちをしています。長方形で平べったくて、かどから手と足がはえています。つぎに廷臣<sup>ていしん</sup>たち十名。これはみんな、ダイヤモンドで全身をきかざつて、兵隊さんたちと同じく、二名ずつでやってきました。そのあとからは王さまの子どもたち。このかわいい子たちは、手に手をとつてたのしそうにぴよんぴよんはねながら、二名ずつでやってきます。ぜんぶで十名いて、みんなハートのかざりだらけです。つづいてはお客たちで、ほとんどが王さまや女王さまたちですが、アリスはそのなかにあの白うさぎがいるのを見つけました。はや口で心配そうにしゃべつていて、だれがなにを言つてもにこにこして、アリスに気が

つかずにとおりすぎました。それからハートのジャックがきます。王さまのかんむりを、真紅しんくビロードのクッションにのせてはこんでいます。そしてこのおもしろい行列の一番最後に、ハートの王さまと女王さまがやってまいりました。

アリスは、自分も庭師三名と同じようにはいつくばったほうがいいのかな、とまよいましたが、王さまの行列でそんなきそくがあるなんて、きいたことはありませんでした。「それに、もしみんなが顔を下にはいつくばって、だれも行列を見られなければ、行列なんかしたつてしようがないじゃない？」そう思つてアリスは、そのまま立つて、まつていました。

行列がアリスの向かいにやつてくると、みんな止まつてアリスをながめました。そして女王さまがきびしい声でききます。「これはだれじゃ！」きかれたハートのジャックは、へんじのかわりににつこりおじぎをしたただけでした。

「ほかものめが！」と女王さまは、きぜわしく何度もふんぞりかえ

ります。そしてアリスにむかってつづけました。「そんな子ども、名前  
は？」

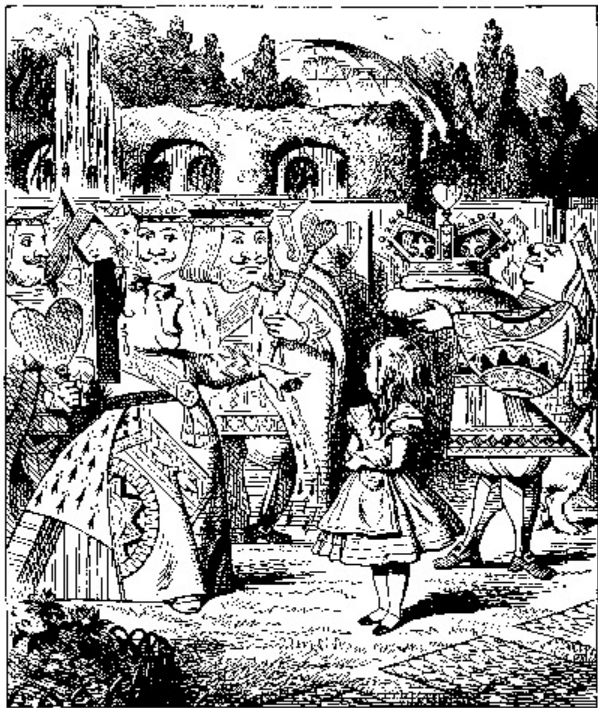
「アリスともうします、女王陛下」とアリスはとつてもれいぎ正しくもうしました。でもそのあとでこう思いました。「でも、これみんなただのトランプなんだわ。なんにもこわがることないわね！」

「してこやつらはだれじゃ？」と女王さまは、バラの木のまわりにはらばいになっていいる庭師たちを指さしました。というのも、顔を下にしてはいつくばっていたし、せなかのもようはみんないつしよなので、女王さまはそれが庭師か、兵隊さんか、ていしん廷臣たちか、それとも自分の子どものうち三名なのか、わからなかったのです。

「あたしにわかるわけないでしょう」アリスはこう言つて、自分のゆうきにわれながらびつくりしました。「あたしにはかんけないことですから」

女王さまは怒つてまっ赤になり、そして野獣みたいにしばらくアリスをにらみつけてから、ぜつきょうしました。「こやつの首をちよん切

れ！  
こやつ  
の——  
「





「ばかおつしやい！」とアリスは、とても大声できつぱりと言いまして、すると女王さまはだまってしまいました。

王さまが手を女王さまのうでにかけて、びくびくしながら言います。「まあまあ、まだ子どもじゃないか！」

女王さまは怒って王さまからはなれ、ジャックにいました。「こやつらをひつくりかえせ！」

ジャックはともしんちょうに、片足でそうしました。

「立て！」と女王さまが、かんだかい大声で言うのと、庭師三名はすぐにとびおきて、王様と、女王さまと、お子たちと、そのほかみんなにぺこぺこおじぎをはじめました。

「やめんか！ めまいがする！」と女王さまがどなります。そしてバラの木のほうを見てつづけました。「ここでいったいなにをしておつた？」

「おそれながらもうしあげますと、女王陛下どの」と二がとてもつましく、片ひざをついて言いました。「てまえどもがしております——」

「なるほど！」女王さまは、その間にバラの木を調べておりました。「こやつらの首をちょん切れ！」そして行列がまたうごきだしました。が、兵隊さんが三名のこつて、かわいそうな庭師たちの首をはねようとしみますので、庭師たちはアリスに助けをもとめてかけよつてきました。

「首なんか切らせないわ！」とアリスは、近くにあつたおつきな花びんに庭師たちを入れてあげました。兵隊さん三名は、一分かそこらうろうろしてさがしていましたが、だまってほかのみんなのあとから行進してきます。

「あやつらの首はちょん切ったか！」と女王さまはさげびます。

「あのものどもの首は消えてしまいました、女王陛下どの！」と兵隊たちがさげんでこたえました。

「よろしい！ おまえ、クロケーはできる？」

兵隊たちはだまってアリスのほうを見ました。この質問が明らかにアリスむけだともいうように。

「ええ！」とアリス。

「ではおいで！」と女王さまがほえ、アリスは行列にまじって、これからどうなるのかな、と心から思いました。

「いやなんとも——よいお天気ですな」とびくびく声がよこできこえました。となりを歩いていたのは白うさぎで、こちらの顔を心配そうにのぞきこんでいます。

「ええとつても」とアリス。「——公爵夫人はどちら？」

「これうかつなことを！」とうさぎは、小さな声ではや口にもうします。こう言いながらも、かたごしに心配そうにのぞいて、それからつま先だちになって、アリスの耳近くに口をもつてきてささやきました。「公爵夫人は死刑宣告をうけたのですよ」

「どうして？」

「いま、『まあかわいいそうに』とおっしゃいましたか？」とうさぎ。

「いいえ、言つてませんけど。ぜんぜんかわいいそうだと思わないし。

『どうして？』っていったんです」

「女王さまの横つつらをなぐったんです——」とうさぎが言って、アリスはゲラゲラわらわらってしまいました。うさぎがちぢみあがってささやきます。「ああおしずかに！　女王さまのお耳にとどきます！　じつはですな、公爵夫人はいささかおくれていらつしやいまして、女王さまがそこで——」

「位置について！」と女王さまが、かみなりのような声でどなりまして、みんなあちこちかけまわりだして、おたがいにごつつんこしてばかりいます。でも、一分かそこらでみんなおちついて、試合開始です。アリスは、こんなふうがわりなクロケー場は見たこともないと思いました。そこらじゅう、うねやみぞだらけ。玉は生きたアナグマで、マレットは生きたフラミンゴ、そして兵隊さんたちがからだをおって四つんばいになって、ゲートをつくっているのです。



アリスがまず一番くろうしたのは、フラミンゴをじつとさせておくことです。フラミンゴのからだは、なんとかうまいぐあいיוחדの下におさめて、足をたらすようにしたのですけれど、でもだいたい、ちやうど首をきちんとのばさせて、その頭でアナグマをたたこうとしたとたん、フラミンゴはぐいつと首をねじって、アリスの顔を見あげます。そしてその顔が、いかにもわけわかりませんという顔つきなので、ついふきだしてしまいます。さらに頭を下げさせて、もう一回やつてみようとする、アナグマがまるまるのをやめて、もぞもぞあつちへいつてしまおうとしているので、すぐく頭にきます。おまけに、アナグマをむかわせたい方向には、たいがいうねやみぞがあつたし、それに四つんばいの兵隊さんたちも、しょっちゅうおきあがつてはクロケー場のよそにうろうろしています。アリスはじきに、こいつはじつにむずかしいゲームだぞ、という結論にたつしました。

参加者たちはみんな、順番をまったりしないで、いっぺんに玉をうつていて、そのあいだずつといいあらそつては、アナグマをとりあつて

けんかしてます。そしてじきに女王さまはカンカンに怒って、そこらじゅうズシズシうろついては、「あやつの首をちょん切れ！」だの「こやつの首をちょん切れ！」だの一分に一度くらいはわめいています。

アリスはとつてもいやーな気持ちになつてきました。そりやたしかに、自分はまだ女王さまとはもめていませんけれど、でもそれがすぐにでもおきかねないのはわかります。「そうなたらあたし、どうなつちやうの？　ここではみんな、首切りが大好きなんだもの。まだ生きてる人がいるほうが不思議つてもんだわ！」

アリスは、なんとかにげだすほうほうはないか、さがしていました。見られずににげられないものかと思つているところへ、宙に変なものがあらわれているのに気がつきました。最初はとつても首をひねりましたが、一分かそこらながめていると、それがニヤニヤわらいだどわかりました。「あら、チェシヤねこだわ。これでお話相手ができた」

「ちようしはどうだい」ねこは、しゃべれるだけのものがあらわれたとたんに言いました。

アリスは、目があらわれるまでまつてから、うなずきました。「両耳が出てからじゃないと、話してもむだね。片耳でもいいけど」一分かそこらで、頭がぜんぶあらわれたので、アリスはフラミンゴをおいて、試合のようすを話しました。ねこは、もうじゅうぶんにあらわれたと思つたらしくて、頭から先はもう出てきませんでした。

「ぜんぜん公平にやつてないと思うわ」とアリスは、ちよつとぐちつぽくきりだしました。「それにみんな、ものすごくけんかばかりで、自分の声もきこえやしない——それにルールがぜんぜんないみたいなの。あつたとしても、だれもそんなのまもつてないわ——それに、なんでもかんでも生きてるから、もうすつごくややこしいのよ。たとえばあそこ、あたしがこんどくぐるはずのアーチは、クローケー場のむこつかわのはしをウロウロしてるし——それにいまは女王さまのアナグマにあてるはずが、あたしのアナグマを見たら、にげだしちやつたんだから！」

「女王さまは気にいった？」とねこは小声でききました。



「ゼーんぜん」とアリス。「だってすごく——」ちやうどそこで、女王さまがすぐうしろにいて、きき耳をたてているのに気がつきました。そこでつづけます。「——おじょうずで、勝つにきまつてるんですもの、試合を最後までやるまでもないくらい」

女王さまはにつこりして、よそへいつてしまいました。

「だれと話をしとるのかえ？」と女王さまがアリスのところによつてきて、ねこの頭をととも不思議そうにながめました。

「あたしのお友だちでございます——チェシャねこなんですよ。しやうかいさせていただけですか」

「どうもようすがまるで気にいらん」と女王さま。「しかし、のぞみとあらば、わが手にせつぷんを許してつかわす」

「やめとく」とねこ。

「失敬なことを！ それと、わしをそんな目で見るな！」と女王さまは、アリスのうしろにかくれてしまいました。

「ねこだつて女王さまを見るくらいはできる。どつかでそう読んだん

ですけれど、どこでかはわすれました」とアリス。

「ふん、こやつはここにはまかりならん」と王さまはとてもきつぱりもうしまして、ちょうどとおりの女王さまによびかけました。「妻や！ おまえ、このねこをどうにかしてもらえんかね？」

女王さまは、問題があればその大小をとわず、解決法は一つでした。「首をちょん切れ！」とまわりを見もしないで申します。

「わしみずから首切り役人をつれてまいるとしよう」と王さまはうれしそうに言つて、いそいで出かけました。

アリスは、いまのうちにもどつて試合のようすを見てみよう、と思いました。女王さまが、カッカしてわめきちらしているのが遠くできこえたからです。順番をのがしたせいで、参加者が三名、もう死刑にされたのがきこえたし、試合はもうめちやくちやで、自分の順番かどうかぜんぜんわからなかつたので、これじゃなんだかまずいぞ、と思いました。そこで自分のアナグマをさがしにでかけました。

アナグマはべつのアナグマとけんかのまつさいちゆうで、だからア

ナグマどうしをぶつけるにはぜつこうのチャンス、とアリスは思いました。ただ一つ困ったことに、フラミンゴがお庭のむこう側にいつてしまつていて、そこでアリスが見たところ、木にとびあがろうとして、むだにがんばっています。

フラミンゴをつかまえてもどつてきたころには、アナグマのけんかも終わつていて、二匹ともいなくなっていました。「でもどうでもいいか。クロケー場のこっち側は、ゲートがぜんぶいなくなっちゃつてるし」そう思つてアリスは、フラミンゴがまたにげださないように、うでの下にしっかりとかかえて、お友だちともつとおしゃべりしようともどつていったのです。

チェシャねこのところにもどつてみると、まわりにかなりおつきな人ごみができていたのでおどろきました。首切り役人と王さまと女王さまが、論争（ろんそう）をしています。三名は同時にしゃべっていますが、それ以外はみんなだんまりで、すぐくもじもじしています。



アリスがすがたを見せたたん、その三名がいつせいに自分の意見をうったえてきて、問題を解決してくれ、といいます。そして三名とも自分の言いぶんをくりかえすのですが、みんな同時にしゃべるので、いったいそれぞれなにを言ってるのか、きちんと理解するのは、とてもたいへんでした。

首切り役人の言いぶんは、首を切りおとすには、まずその首がどこかのからだにくつついていなくちゃダメだ、というものです。首だけの首を切りおとすなんて、いままでやったこともないし、だからいまさらこの歳（とし）になつてはじめるつもりもないよ、と言います。

王さまの言いぶんは、首がそこにあるんだから、それを切りおとすだけのことでなんの問題もない、へりくつをもうすな、というものでした。

女王さまの言いぶんは、いますぐなんとかしないと、みんな一人のこらず死刑にしてやる、というものでした（この最後のことで、みんなあんなに困って不安そうだったのです）。

アリスとしてはなんと行っていいかわかりませんでした。「あれは公爵夫人のものだわ。だから公爵夫人におききになったほうがいいわよ」

「あやつはろうやにおるぞ。つれてまいれ」と女王さまが首切り役人にもうしますと、役人は矢のようにびゅーんととんでいきました。

役人がいつてしまったとたんに、ねこの頭は消えだしまして、公爵夫人をつれて役人がもどってきたころには、もう完全に消えてしまいました。だから王さまと役人はあちこちかけずりまわって、必死でねこをさがし、ほかのみんなは試合にもどっていききました。

## 九 にせウミガメのお話

「またお目にかかれてどんなにうれしいか、あなた見当もつかないでしょう、このかわいいおじょうちゃんだったら！」と公爵夫人は、愛情（あいじょう）たっぷりのアリスにうでをからめてきて、二人は歩きだしました。

夫人がずいぶんごきげんうるわしいので、アリスはともうれしく思いました。そして台所であったときにあんなにあれ狂ってたのは、コショウのせいではなかったのかも、と思いました。

「あたしが公爵夫人になったら」とアリスはつぶやきました（が、自分でもあまり見こみあるとは思ってなかったけど）「台所にはコショウなんか、ぜーんぜんおかないんだ。スープはコショウなしでもじゅうぶんおいしいもの——人がカッカしちゃうのは、みんなからいコショウのせいなのかも」アリスは、新しい規則みたいなものを見つけたので、とても得意になってつづけました。「それでみんながにがにがしく

なるのはサンショウのせいなんだ——しぶくなるのは、茶しぶのせい  
で——それで——それで子どもがニコニコしてるのは、おきとうとか  
のせいで。みんながこれをわかつてくれればいいのに。そうしたら甘  
いもの食べすぎてもあんなに怒らないだろうし——」

おかげですっかり公爵夫人のことをわすれてしまっていたので、耳  
のすぐ近くで声がきこえてちよつとびっくりしてしまいました。「な  
にか考えごとをしていたでしょう、それで口がおるすになるんですよ。  
その教訓がなんだか、いまは話せないけれど、しばらくしたら思いだ  
しますからね」

「教訓なんかないんじゃないやありませんか？」アリスは勇気を出して言っ  
てみました。

「これこれ、おじようちゃん。どんなことにも、教訓はあるですよ、  
見つけさえすれば」こう言いながら、夫人はアリスの横にもつとギョッ  
と身をよせてきました。

アリスは、夫人とこんなにくつついてるのは、あんまり気に入ら



ませんでした。まず、公爵夫人はすつごくブスだったからで、さらにちようどあごがアリスのかたにのつかるせたけで、しかもいやんなるくらいすごくとがったあごだったからです。でも、失礼なことはしたくなかったので、なるべくがまんすることにしました。

「試合はちよつとましにすすんでるようですね」とアリスは、間をもたせようとして言いました。

「いやまつたく」と公爵夫人。「してその教訓は——『ああ、愛こそが、愛こそがこの世を動かす!』」

「だれかさんは、みんなが自分のやることだけ気をつけてりや動くつて言つてませんでしたっけ」とアリスはささやきました。

「ああそうでしたっけ。でも言つてることはまあ同じですよ」そう言いつつ、夫人はとがったあごをアリスのかたにつきさします。「そしてその教訓は——『安言（やすごと）づかいの意味（いみ）うしない』」  
「教訓さがしが、ほんつとに好きなのねえ」とアリスは思いました。



PAHHA-LE

夫人はちよつと間をおいて言いました。「ひよつとして、わたしがなぜおじょうちゃんのこしに手をまわさないのかな、と思ってるんでしょう。そのわけはね、そのフラミンゴがかみつくんじやないかって、ちよつと心配なのよ。ちよつと実験してみましようか？」

「ずいぶんピリピリしてますよ、このフラミンゴ」アリスは不安そうにこたえました。そんな実験をためしてほしいとは、これっぽっちも思いません。

「おつしやるとおり」と公爵夫人。「フラミンゴとカラシはどっちもピリピリしてますからねえ。そしてその教訓は——『たつ鳥あとをにごさず』」

「ただカラシは鳥じやないでしょう」とアリス。

「いつもながら、おつしやるとおり」と公爵夫人。「なにごとそやつて、ちゃーんとせいとんできてるのねえ」

「たしか鉋物こうぶつだったと思うけど」とアリス。

「もちろんさよう」公爵夫人は、いまではアリスが言うことならな

んでもさんせいするみたいです。「このあたりの山では、カラシをいっぱいほつてますわよ。そしてその教訓は——『ゴンベ権兵衛が山ほりや、カラシをほじくる』」

アリスはいまの夫人のせりふをきいていませんでした。「あ、わかつた！ あれは植物よ！ ちつとも植物らしくないけれど、でもそうよ」

「いやはやまったくそのとおり。そしてその教訓とは——『自分らしくなろう』——あるいはもつとかんたんに言えば——『自分がそうであったりそうであったかもしれないものが、自分が他人にそうでないと思われたものでないもの以外のものとして見られるもの以外のものでないと思わないこと』」

訳者のおねがい論理的にこれであつてるかどうか自信がないので、だれかチェックしてほしいんだけど。

「いまのは、かみに書いたらもつときちんとわかると思えますけれど、でもそうやっておっしゃっただけだと、なかなかついてけません

でした」アリスはとてめれいぎ正しく言いました。

「わたしがその気になったら、いまのなんかメジヤないですよ」と公爵夫人は、うれしそうに返事しました。

「おねがいだから、いまよりながく言おうとなんかなさらないで、お手間でしようから」とアリス。

「おやまあ、手間だなんてとんでもない！」と公爵夫人。「これまで申し上げたことはすべて、プレゼントとしてさしあげますですわよ」

「ずいぶん安上がりなプレゼントですこと！」とアリスは思いました。「おたんじょう日のプレゼントがそんなのでなくてよかったわ！」でもこれはもちろん口には出しませんでした。

「また考えごと？」と伯爵夫人は、またまたあごでつついてきます。

「あたしにだつて考える権利があります！」アリスはきつぱりといいました。だんだん心配になつてきたからです。

「ちようどぶたに空とぶ権利があるように。そしてそのきようく

でもここで、アリスがとってもおどろいたことに、公爵夫人の声か  
とぎれました。大好きな「教訓」ということばのどまんなかだったの  
に。そしてアリスのにからめたうでが、ガタガタふるえはじめました。  
目をあげると、まんまえに女王さまが立っていて、うで組みして、か  
みなり嵐みたいなしかめつつらをしています。

「なんともすばらしいお天気でございます、陛下！」公爵夫人が、小  
さなよわわしい声で言いかけてました。

「さあて、きちんと警告を出してやろうぞ」と女王さまは地面をふ  
みならしてどなります。「おまえか、おまえの頭のどちらかが消えうせ  
るのじゃ、しかもいますぐに！ すきなほうを選ぶがよい！」

公爵夫人はすきなほうを選んで、いつしゆんですがたを消しました。

「試合を続けるがよいぞ」女王に言われたアリスは、おつかなくて一  
言もいえずに、だまって女王さまについてクロケー場にもどりました。

ほかのお客たちは、女王さまがいないのをいいことに、ひかげで休  
んでいました。でも、すがたが見えたとたんに、あわてて試合にもど

りました。女王さまが、一刻でもおくれたらいのちはないよ、ともうしわたしただけなのに。

みんなの試合中、女王さまはずつとほかのプレーヤーたちといいあらそつてばかりいて、「あやつの首をちよん切れ！」だの「こやつをちよん切れ！」だのとどなつています。女王さまに死刑せんこくされた人たちは、兵隊さんたちに連行れんこうされるのですが、するとその兵隊さんは、ゲート役をやめなくてはならず、そしてプレーヤーたちも王さまと女王さま、そしてアリス以外はみんな連行れんこうされて、死刑の宣告をうけていたのでした。

すると女王さまは、かなり息をきらして試合の手をとめて、アリスにこう申しました。「おまえ、にせウミガメには会つたかえ？」

「いいえ。にせウミガメってなんなのかも知りません」

「にせウミガメスーブの材料になるものじゃ」と女王さま。

「見たことも、きいたこともございませぬ」とアリス。

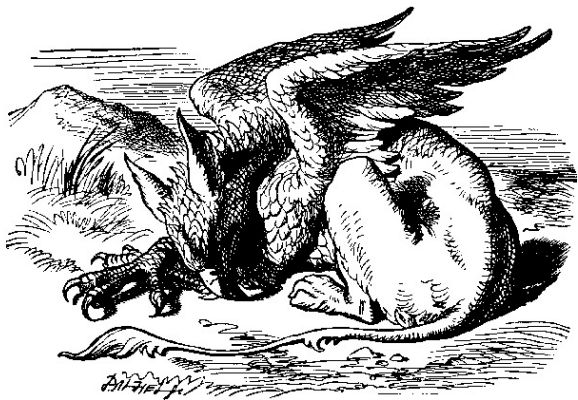
「ではおいで。あやつが身の上話をしてくれるであろう」

二人がつれだつて歩き出すと、王さまが小さな声でそこにいた全員にむかつて、こうもうしわたすのが聞こえました。「みなの方、刑（けい）は免除（めんじょ）してつかわす」

「わーい、それはすてき！」とアリスは思いました。女王さまが命じた処刑（しよけい）が多すぎて、ずいぶんいやな気持ちだったからです」

まもなく、二人はグリフォンに出くわしました。ひなたぼっこをしながら、ぐつすりねむっています（もしグリフォンってなんだか知らなかったら、イラストを見てね）。起きんか、このぐうたらめが！」と女王はもうします。「このわかいご婦人をつれて、にせウミガメのところであやつの身の上話をきかせてやるのじゃ。わしはもどつて、めいじた処刑（しよけい）をいくつか監督せねばならんのでな」そして歩みさつて、アリスとグリフォンは二人きりになりました。アリスは、この生き物のようすがあんまり気に入りませんでした。アリスは、この生き物の荒（あら）つぽい女王さまについてくよりは、グリフォンといっしょのほうが安全だろうと思いました。





グリフォンはおきあがって、目をこすりました。それから女王さまがみえなくなるまでながめて、それからくすくすわらいます。そして「たのしいねえ」と、半分自分に、半分アリスにいいました。

「たのしいって、なにが？」とアリス。

「え、女王さんだよ。あれってみんな、女王さんの『ごっこ』だね。だれも処刑しよけいなんかされないんだよ。おいで！」

「ここじゃみんな、『おいで！』ばかり。こんなに命令ばっかされたことってないわ、いちども！」そう思いながらも、アリスはゆつくりついていきました。

ほどなく、にせウミガメが遠くに見えてきました。いわのちよつとしたふちのところに、かなしくさびしそうにすわっています。近くにくると、それがむねのはりさけそうなため息をついているのがきこえます。まあほんとうに可愛いそう、とアリスは思いました。「なにがそんなにかなしいの？」とアリスがグリフォンにたずねますと、グリフォンはほとんどさつきと同じせりふでこたえました。「あれってみんな

な、あいつの『ごっこ』なのね。あいつはぜんぜんかなしくなんかないんだよ。おいで！」

そこで二人はにせウミガメにところにやってきました。にせウミガメは、おつきな目に涙をいっぱいいうかべてこつちを見ましたが、なんにも言いません。

「このおじょうちゃんがさ、おまえの身の上話をききたいって、とかなんとか」とグリフォン。

「話してあげるわよ」とにせウミガメは、ふかくうつろな声でいいました。「二人とも、おすわんなさい。ぼくが話しおえるまで、ひとことも口きくんじやないよ」

そこで二人はすわり、しばらくはだれもなにも言いませんでした。アリスは思いました。「話しはじめなかったら、いつまでたっても話しおえるわけがないのに」でも、おとなしく待ちました。

「むかしは、ぼくもほんもののウミガメでしたのさ」にせウミガメはやつと口をひらきました。

このことばのあとには、とつてもながーいだんまりがつづきました。それをやぶるのは、ときどきグリフォンなたてる「ヒジユクルル！」とかいうしゃつくりと、にせウミガメがずつとたてる、めそめそしたすすり泣きだけでした。アリスはほとんどたちあがつて「ありがとうございました、とつてもおもしろいお話でした」と言うところでしたが、ぜつたいにあれだけつてはずはないと思つたので、じつとすわつてなにも言いませんでした。



やつとこさ、にせウミガメが先を話しはじめました。ちよつとは落ち着きました。が、まだときどきちよつとすすり泣いています。「小さいころは、海中学校に行つたんですよう。校長先生は、おばあさんガメで——ぼくたちは、オスガメつてよんでけど——」

「どうしてメスなのにオスガメなの？」とアリス。

「すが目だつたからに決まつてるではないの、だからおすがめ」とにせウミガメは怒つたように言いました。「あんたバカア？」  
◎ガインックス

「まつたくそんなかんたんなこときいたりして、恥ずかしくないのかよ」とグリフォンがつけたして、二匹ともだまつてすわつたまま、かわいそうなアリスを見つめましたので、アリスはこのまま地面にしずんで消えてしまいたい気分でした。ようやくグリフォンがにせウミガメに申しました。「つづけるよ、だんな。日がくれちまうぜ」そこでにせウミガメはこうつづけました。

「うん、ぼくらは、海の中の学校にいったのよ、信じないでしょうけど——」

「信じないなんて言っていないでしょう！」とアリスが口をはさみま  
す。

「言ったね」とにせウミガメ。

「いいからだまって！」アリスが言いかえすより先に、グリフォン  
がわりこみました。にせウミガメがつづけます。

「最高の教育をうけてねえ——もうまいにち学校にかよったくらい  
で——」

「あたしだって学校くらいかよったわ。そんなにじまんすることで  
もないでしょ」

訳者の説明 これはむかしのお話なので、学校はいまとちよつとちがう。い  
まはみんな学校にいくけれど、むかしはお金持ちしか学校になんかいか  
なかつたんだ。だから学校にいった、というのはけつこうじまんできること  
だつたんだよ。

「追加で選べる科目もあつた？」とにせウミガメはちよつと不安そ

うにききます。

「ええ。フランス語と音楽」

「せんたくも？」とにせウミガメ。

「あるわけないでしょう！」アリスはブンブンして言いました。

「ああ、じゃああなたのは、ほんとのいい学校じゃなかったのよ」とにせウミガメは、すぐくほつとしたような口ぶりです。「だつてうちの学校では、請求書の最後んとこに『フランス語、音楽、およびせんたく——追加』つてあったもの」

訳者の説明 イギリスの学校は私立ばかりで、毎月かそこら、学校から授業料の請求書がくるのがあたりまえだったわけ。それで、それは科目ごとにお金がとられるようになっていて、フランス語とか、音楽は、追加でお金をはらわなきゃダメだったんだよ。いまの塾じゅくみたいなものだと思つてね。

ついでに言つておくと、せんたくが追加料金なのは、別にせんたくという授業があるからじゃなくて、生徒がずっと学校に寝泊まりする寄宿学校では、洗濯物を学校におねがいすることができたということ。だから請求書には、ほんとうに「せんたく」というのはあったんだけれど、でもそれ



は授業じゃあないんだ。

「でもおせんたくなんてあんまりいらないうでしよう。だって海のそこに住んでるんだもん」

「だから選べたのよ、これがホントのせんたく科目。でもうちはお金がなくて、せんたくはとれなかったのよ。ふつう科目だけ」とにせウミガメは、ためいきまじりで言います。

「ふつう科目って？」とアリス。

「もちろんまずは、獄語と惨数ね」とにせウミガメ。「惨数もいろいろで、打算とか、安産とか、あと美化りかに醜怪化しやかいもね」

「『醜怪化』ってきいたことないけど、なんなの？」アリスはゆうきを出してきいてみました。

グリフォンは、びつくりして両まえ足をあげました。「なんだと！『醜怪』をきいたことがないだ！おまえ、さすがに『美化』のほうくらいはわかるよな？」

「ええ」とアリスは、自信なさそうにこたえました。「それは——つまり——いろんなものを——その——きれいに？——すること？」

「ふん、それがわかってるんなら、それで醜怪化しやかいがわかんないんなら、おまえってホンットの大バカもんだぞ」

それ以上はきかないほうがいいぞと思ったので、アリスはにせウミガメに言いました。「ほかにはどんなお勉強をしたの？」

「えーと、溺死れきしでしょ」とにせウミガメは、ひれで科目をかんじようしていきまます。「——溺死、古代死と現代死ね。それと、致死学、それから頭蓋絞殺ずがこうさく——絞殺の先生は、年寄りのヤツメウナギで、週に一度だけくんの。この先生は、アリバイ工作ちようこくに上告がとくいだったのよう。出血がホントにきびしくてねえ」

「ちゃんと出たんですか？」とアリス。

「ぼくはあんまり。ウロコが硬くて血が出にくいもん。それにグリーフォンはとつてないし」

「時間がなくてよ。でもおれ、惨数の上級はとつたぜ。先公がすん

「ごいタクおやじ。いやまったく」とグリフォンが言います。

「ぼくはその先生には教わってないけど」とにせウミガメがため息をつきました。「でも話によると、教えてたのが悲<sup>ひきざん</sup>つ惨だつてねえ」

「ああそのとおり、そのとおり」とグリフォンもためいきをついて、生き物は両方とも顔を前足でおおつてしまいました。

「じゃあどうい<sup>じかんわり</sup>う時間割になつてたの？」アリスはあわてて話題を変えようとしました。

「最初の日は十コマあるのよ」とにせウミガメ。「つぎの日が五コマ、そのつぎは三コマつてぐあい」

アリスはびつくりしてしまいました。「ずいぶん<sup>じかんわり</sup>へんな時間割ねえ！」  
「え、そのまんまじゃん。時間を割つてるんだよ。日ごと<sup>じかんわり</sup>に割つてくわけ」とグリフォン。

これはアリスにしてみれば、なかなか目新しいアイデアでしたので、口をひらくまえに、よつく考えてみました。「じゃあ、十日目には一コマだけだつたはずね？」

「もちろんそのとおりよ」とにせウミガメ。

「じゃあ、十一日目からあとはどうしたの？」アリスはねっしんに  
つづけます。

でもグリフォンがきつぱりといいました。「じかんわり時間割はもうたくさん。  
こんどはこの子に、おゆうぎの話をしてやんなよ」

## 一〇 ロブスターのカドリーユおどり

にせウミガメはふかいためいきをついて、ひれの一つで目をおおいました。そしてアリスを見て話そうとするのですが、そのたびにすすり泣きがでて、一分かそこらは声がでません。「のどに骨がつかえたと きといっしょだよ」とグリフォンは、にせウミガメをゆすつたり、背中をたたいたりしはじめました。やつとにせウミガメは声が出るようになって、ほっぺに涙をながしながら、またつづけました。

「あなた、海のそこにはあんまり住んだことがないかもしれない——」（「ないわ」とアリス）——「あとロブスターに紹介されたこともないようねえ——」（アリスは「まえに食べたことは——」と喋りかけて、すぐに気がついて、「いいえ一度も」ともうしました）「——だから、ロブスターのカドリーユおどりがどんなにすてきか、もう見当もつくわけないわね！」

「ええ、ぜんぜん。どういうおどりなんですか？」とアリス。

グリフォンがいました。「まず海岸にそって、一列になるだろ——」  
「二列よ！」とにせウミガメ。「アザラシ、ウミガメ、シヤケなんか。それでクラゲをぜんぶどかしてから——」

「これがえらく時間をくうんだ」とグリフォンが口をはさみます。

「——二回すすんで——」

「それぞれロブスターがパートナーね！」とグリフォンもわめきま  
す。

「もちろん。二回すすんで、パートナーについて——」

「——ロブスターを替えて、同じように下がる」とグリフォンがつ  
づけます。

そしてにせウミガメ。「そしたら、ほら、ロブスターを——」

「ほうりなげる！」とグリフォンがどなつて、宙にとびあがりまし  
た。

「——沖へおもいつきり——」

「あとを追っかけて泳いで！」とグリフォンぜつきよう。

「海の中でとんぼがえり！」とにせウミガメ、こうふんしてぴよんぴよんはねてます。

「またロボスターを替える！」グリフォン、ほとんどかなきり声。「陸にもどつて最初の位置にもどるのねえ」とにせウミガメが、いきなり声をおとしました。そして生き物二匹は、さつきまで狂つたみたいにはねまわつてたのに、またとつてもかなしそうにしずかにすわつて、アリスを見ました。

「とつてもきれいなおどりみたいね」アリスはおずおずと言いました。

「ちよつと見てみたい？」とにせウミガメ。

「ええ、ぜひ」

「よーし、じゃあ最初のところ、やってみましょうか」にせウミガメがグリフォンにいいました。「ロボスターなしでもなんとかなるわね。どつちがうたう？」

「ああ、おまえがうたつてくれよ。おれ、歌詞かしわすれちゃった」

そこで二匹は、まじめくさってアリスのまわりをおどりだし、ときどき近くにきすぎてアリスのつま先をふんずけて、ひょうしをとるのに前足をふって、そしてにせウミガメはこんな歌を、とつてもゆつくりかなしそうにうたつたのでした

『もつとさつさと歩いてよ』とスケソウダラがウミウシに。

『ヤリイカうしろにせまつて、ぼくのしっぽをふんでるの。』

ロブスターとウミガメが、あんなにいそいそ進んでる！

みんな砂利浜で待つてるし——あなたもおどりに入ろうよ！

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼ

くらのおどり

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼ

くらのおどり

みんながぼくらをつかまえて、ロブスターと海へ投げ出す！



『どんなにたのしいことなのか、あなたはたぶんわからない!』  
なのにウミウシ横目でにらみ、『遠すぎ、遠すぎ!』と申します

スケソウダラさんありがとさん、けどおどりにや入りません  
入らん、入れん、入らん、入れん、入らん、入れん、おどりに  
入らん、入れん、入らん、入れん、入らん、入れん、おどりに  
『遠くたつていいじゃない!』と、うるこの友だちこたえます。

『世界は浜辺に満ちている。こちらじゃなければあちらにも  
イギリス浜からはなれるごとに、フランス浜辺に近くなる――  
だからいとしいウミウシさん、青ざめないでおどろうよ。』

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼ  
くらのおどり

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼ

不思議の国のアリス

くらのおどろ  
「『



「どうもありがとう、見ててとってもおもしろいおどりでした」アリスはそれがやつと終わってくれて、じつにホッとしました。「それにあの、スケソウダラのふうがわりな歌も、すごく気に入りました！」

「ああ、スケソウダラといえば、もちろん見たことあるのよねえ」とにせウミガメ。

「ええ、しょつちゆう出てくるもの、ばんご——」アリスはあわてて口を閉じました。

「バンゴつてどこだか知らないけど、そんなによく見かけてるなら、どんなかつこうかも知ってるわよねえ」とにせウミガメ。

「ええたぶん。しつぽを口にくわえてて——それでパン粉まみれ」アリスは考えこんでいいました。

「パン粉はちがうわあ。パン粉は海で洗い流されちゃうでしょ。でもたしかに、しつぽは口にくわえてるよね。なぜかというところ——」ここでにせウミガメはあくびをして目をとじた。——「この子に理由とか、説明してやんなさいよう」とグリフォンをせつつきます。

「理由はだねえ、やつら、ロボスターとホントにおどりにいくんよ。それで海にほうりなげられるだろ。だからずいぶん落っこちるわけね。それでもうしつぽをまいちやうわけ。するとそれが口に入る。するともう、それが出てこなくなる。おしまい」

「ありがと。それはおもしろいわね。スケソウダラのこと、こんなにはじめて知ったわ」

グリフォンが言いました。「じゃあもつと話してやろうか。なんでスケソウダラっていうか知ってる？」

「考えたことない。どうしてなの？」とアリス。

「せんたくするんだよお」とグリフォンは、とつてもおもおもしろい返事をします。

アリスはまるつきりわけがわかりません。「おせんたく、をする！」と不思議そうにくりかえすばかり。

「しようがねえなあ、じゃああんたの服はどうあらうの？ どうやつてそんな、まっ白きれいになるの？」

アリスは自分の服を見おろして、ちよつと考えてから口をひらきました。「洗剤、だと思っけど。『透明感あふれる白さです』って」

「海のものせんたくは、スケソウダラがやんの。『きれいすぎて、すけそうダラ<sup>だわ</sup>！』ってね。これで一つ、かしこくなつたろう」

「でもどこでかわかすの？」アリスはすごく不思議におもつてききました。

「たたみいわしの上だよ、きまつてるじゃん。そこのエビでもそんなくらいは知ってるぜ」グリフォンはいささかあきれたようです。

アリスはまださっきの歌のことを考えてました。「あたしがスケソウダラなら、ヤリイカにこう言つたと思うな。『下がつてくれませんか？あなたにはついてきてほしくありませんの！』」

「うんたしかにヤリイカなんかぜつたいにつれてかないわよねえ」  
とにせウミガメ。「まともなさかななら、ヤリイカとつきあつたりはしないもの」

「あら、そういうものなの？」アリスはとつてもおどろいていいま

した。

「あたりまえだよ。もしぼくがおでかけするときに、どつかのさかながきて『おでかけですか』なんてきいたら、ぼく言っちゃうよ。『うるせーな、ヤリイカ!』って! (訳注うるさいうるさい、苦しいのはわかっているんでい!)」

「……それって『わりいか』ってこと?」とアリス。

「ぼくがそうだと云ったらそうなのよ」とにせウミガメは、ちよつとむつとした口ぶりで言いました。そしてグリフォンがつづけけます。「さあ、あんたの冒険をちよつときかせてもらおうじゃないの」

「あたしの冒険っていうと——けさからのなら話してあげられるけど」アリスはちよつとおずおずと言いました。「でもきのうまでもどつてもしかたないわ、だってそのころはあたし、別の人だったから」

「いまの、なんのこつたか説明しなさい」とにせウミガメ。

グリフォンがうずうずして言います。「だめだめ、冒険が先。説明するのは、ありやえらく時間がかかるんだ」

そこでアリスは、白うさぎを見たところから自分の冒険の話をはじめました。最初はちよつと不安でした。だって二匹の生き物がすつごく近くによつてきて、アリスの左右について、お目目とお口をすんごくひらいていたからです。でも、先にすすむうちに、ゆうきが出てきました。きき手はずつとなにも言いませんでしたが、いもむしに『ウイリアム父さんお歳をめして』を暗唱して、ことばがぜんぶちがつて出てきたところになると、にせウミガメが思いつきり息をすいこんで言いました。「それはじつにおもしろいわあ」

「うん、なにもかもすつごくおもしろい」とグリフォン。

「ぜんぶちがつて出てきたのねえ」とにせウミガメは考えこんでくりかえします。「ぼく、この子がここでなにか暗唱するのをきいてみたいわ。やれつて言つてやつてよ」とにせウミガメはグリフォンのほうを見ました。まるでグリフォンがアリスに命令する力があると思つてるみたいです。

「立つて『不精者ぶしょうものの宣言』を復唱するんだ」とグリフォン。



「まったくこの生き物って、人に命令してばかりで、お勉強の復習ばかりさせるんだから。いますぐ学校にもどったほうがましかも」でもアリスは立ちあがって復唱をはじめました。でも頭がロボスターのカドリーユおどりでいっぱいだったので、自分がなにを言ってるのかまるでわからず、おかげでことばもずいぶんへんてこになっちゃったのです。



「ロブスターの宣言を、わたしが聞いたところでは

『わしはこんがり焼かれすぎ、髪に砂糖をまぶさなきや』

アヒルがまぶたでするように、ロブスターは鼻ヅラで

ベルトとボタンを整えて、つま先そとに向けまする」

「砂がすっかりかわいたら、ヒバリまがいにごきげん

サメを小ばかにしてまわる

でも潮がみちてサメがくりや

声はおびえてふるえます。」

「おれが子どものころに暗唱したのは、ちがつてるなあ」とグリフォン。

「うん、ぼくははじめてきくけど、でもわけわからないデタラメにしかきこえないわよ」とにせウミガメ。

アリスはなにも言いませんでした。すわって、顔を両手でおおって、もうこの先二度と、なにもふつうにはおきないのかしら、と考えてい

ました。

「説明してもらえないかしらあ」とにせウミガメ。

「説明できないよ、この子」とグリフォンがいそいで言います。「つぎんところ、やってごらん」

「でもつま先はどうなるのお？ だってロブスターが、どうやった  
らそれを鼻でそとに向けるのお、ねえ？」

「おどりの最初のポジションよ」とアリスは言いました。が、なにもかもとんでもなく頭がこんがらがっていて、話題を変えたくてしかたありませんでした。

「つぎんところ、やってごらん」グリフォンが、まちきれないようす  
で言いました。「出だしは『とおりすがりにそいつの庭で』だよ」

アリスはとてもさからつたりできませんでしたが、でもぜったいに  
ぜんぶめちやくちやになるな、と思ったので、ふるえる声でつづけま  
した

「とおりがりにそいつの庭で、わたしが片目で見ただことにゃ  
ヒヨウとオウムがパイをわけ——

ヒヨウがたべたはパイ皮、肉汁と肉

オウムの分け前、お皿だけ。

パイがおわるとおなさけに

オウムはおさじをもちかえり

ヒヨウはうなつてナイフとフォーク

夕餉ゆうげのしめは、あわれな——」

「こんなの暗唱してもらつてどうしろつてゆーの？」とにせウミガ  
メが口をはさみます。「とちゅうで説明してくれなきや！ ぼくがこれ  
まで聞いた中で、一番わけわからんしろものだわ！」

「うん、そのくらいにしとこうね」とグリフォンが言つて、アリス  
はよろこんでそれにしましたがいました。

グリフォンがつづけます。「ロブスターのカドリーユおどりを、べつ

のやりかたでやろうか？ それともにせウミガメに歌をうたってほしい？」

「ああ、歌がいいです、おねがい、にせウミガメさんさえよろしければ」アリスのへんじがあまりに熱心だったので、グリフォンはちよつと気を悪くしたようです。「ふん、まあいろんなしゅみの人がいるからね！ おいだんな、この子に『ウミガメスープ』をうたってやってみるんない？」

にせウミガメはふかいたためいきをつくときどきすすり泣きでつかえる声で、こんな歌をうたいました

「みごとなスープ、みどりのどろどろ

あつあつおなべでまってる！

だれでものりだすすてきな美食！

ゆうべのスープ、みごとなスープ

ゆうべのスープ、みごとなスープ

みいいごとおなスウウプ！

みいいごとおなスウウプ！

ゆうううべのスウウプウ！

みごとなみごとなスープ！」

「みごとなスープ！

さかなもおにくもサラダもいらぬ！

二ペンスほどのみごとなスープ

でだれもがすべてをなげだしまししょう！

みごとなスープが一ペンス！

みいいごとおなスウウプ！

みいいごとおなスウウプ！

ゆうううべのスウウプウ！

みごとなみいごとなスウウウプ！」

「さあ、サビをもう一度！」とグリフォンがさけんで、にせウミガ

メがちょうどそれをくりかえしはじめたとき、遠くのほうで「裁判がはじまるぞ！」ときげびがきこえました。

「おいで！」とグリフォンは、アリスの手をひいて、歌の終わりをまたないで、かけだしました。

「なんの裁判なの？」アリスはきれぎれの息でききました。でもグリフォンは「おいで！」と言うだけでもつとはやく走りだして、にせウミガメのかなしそうな声は、背中からのそよ風にのって、ますますかすかにきこえてくるだけとなりました――

「ゆうううべのスウウプウ

みごとなみごとなスープ！」





John Tenniel

## 一一 タルトをぬすんだのはだれ？

ハートの王さまと女王さまは、ついたときには玉座にすわっていましたが。そのまわりには、大群衆が集まっています——いろんな小さな鳥や動物、さらにはトランプひとそろい。ジャックが王さまたちの前でくさりにつながれていて、その両側に兵隊さんがついています。そして王さまの近くには、白うさぎがいて、片手にラッパ、片手に羊皮紙ようひしのまきものをもっています。法廷のまん中にはテーブルがあつて、タルトののつたおつきなお皿がありました。すぐおいしそうだったので、アリスは見ているだけでおなかがすいてきました——「はやいところ裁判をすませて、おやつをくばってくれないかな！」でもこれはありそうになかったので、ひまつぶしにアリスはまわりのものをなにもかも見ていきました。

裁判所にくるのははじめてでしたが、本でよんだことはあつたので、ほとんどなんでも名前がわかつてアリスはとてもとくいでした。「あれ

が判事ね、おつきなかつらをかぶってるもの」

ちなみにその判事というのは、王さまでした。そしてかつらの上から王冠をかぶっていたので（どんなぐあいだったか見たければ、この本の最初にある口絵を見てね）、あまり落ち着かなそうで、それがよくなりそうなようありませんでした。

「そしてあれば陪審席ばいしんせき。そしてそこにいる十二匹の生き物だけど」（生き物っていうしかなかつたんだ、動物もいれば鳥もいたから）「あれがたぶん、陪審員ばいしんいんね」アリスはこの最後のことばを、二三回くりかえしました。ちよつと得意だったのです。だって、こんなに小さくてこんなことばの意味をぜんぶ知ってるなんて、あんまりいいはずだと思つたからで、それはそのとおりでした。でも、ただの「陪審ばいしん」でもぜんぜんかまわなかつたのですけどね。

陪審員ばいしんいん12人たちは、みんな石板にいそがしくなにか書きつけています。「あれはなにをしてるの？ 裁判がはじまってるんだから、なにも書くことないはずでしょう」とアリスはグリフォンにささやきました

た。

「自分の名前を書いてんの。裁判が終わるまでにわすれちゃうとこわいと思ってるんだよ」とグリフォンがささやきかえます。

「馬鹿な連中！」とアリスはおつきなけいべつするような声をあげましたが、すぐにやめました。白うさぎが「せいしゆくに！」とさけんだからです。王さまはめがねをかけて心配そうにあたりを見まわし、だれがしゃべっているのかを見ようとします。

アリスは、陪審員たちが「馬鹿な連中！」と書きとめたのがわかりました。まるでそのかたごしに見ているかのようです。なかの一人が「馬鹿」と書けなくて、となりにきいているのもわかりました。「裁判が終わるまでに、あの石板はまるでわけわからなくなるだろうなあ」とアリスは思いました。

陪審員たちの一人が、きしる石筆を使っていました。もちろんアリスは、これががまんできなかつたので、法廷をぐるつとまわってそいつのうしろにくると、じきにすきを見つけて、その石筆をとりあげて

しまいました。とつてもすばやくやったので、かわいいそうな陪審員ばいしんいんさん（それはあのトカゲのビルでした）はいったいなにおきたのか、さっぱりわかりませんでした。そこらじゅうをさがしまわったあげくに、その日はずつと、指で書くしかありませんで、これはまったくさんの役にもたちません。石板になんのしるしものこさなかつたからです。

「こくちかん告知官、そじょう訴状を読み上げるがよい！」と王さま。

これをうけて、白うさぎはラップを三回ふきならすと、ようひし羊皮紙のまきものをひらいて、こんなものをよみあげました

「ハートの女王、タルトをつくる

ある夏の日に

ハートのジャック、タルトを盗み

一つのこらずかつさらう！」

「では判決をまとめるがよい」と王さまは陪審に言いました。

「まだです、まだです！」うさぎがあわてて止めます。「それより先に、たくさんやる必要があります！」

「最初の証人をよべ」と王さま。そして白うさぎがラツパを三回ふきならして、さげびました。「証人だいい号！」

最初の証人は、あの帽子屋さんでした。片手にお茶わん、片手にバターパンをもっています。「国王陛下、こんなものをもつてきやして、すまんこつてす。でもよばれたときに、まだお茶がすんでなかったもんでして」



「すんでいたはずだが」と王さま。「いつからはじめた?」

帽子屋さんは三月うさぎのほうを見ました。三月うさぎは、ヤマネとうでをくんで、あとからついてきたのです。「たしか三月の十四日だった、と思うけど」

「十五だよ」と三月うさぎ。

「十六」とヤマネ。

「書いておけ」と王さまは陪審にいました。そして陪審員は、ねっしんに、石板に日づけを三つとも書いて、それからそれを足して、そのこたえをこんどはシリングとペンスになおします。

「帽子をとりなさい」と王さまが帽子屋さんにもうします。

「こいつあつしのもんじやございませんで」と帽子屋さん。

「ぬすんだな!」と王さまはさげび、陪審のほうを見ると、みんなすぐにそのじじつをメモします。

「こいつあ売りものでさあ。自分の帽子なんかもってませんや。なんせ帽子屋、ですからね」と帽子屋さんは説明します。



ここで女王さまがめがねをかけて、帽子屋さんをじつとながめました。ながめられた帽子屋さんは、青ぎめてヒクヒクみぶるいしています。「証言をするがよい。それと、そうビクビクするな、さもないところ場で処刑させるぞ」

こういわれても、証人はちつともげんきになりません。あいかわらずもじもししながら、おどおどと女王さまのほうを見て、混乱しすぎてバターパンのかわりにお茶わんのほうをかじってしまいました。

ちょうどこのとき、アリスはとっても変な気分になりました。いったいなんだろうとずいぶん首をかしげたのですが、やがてなんだかわかりました。またおつきくなりだしてるのです。最初は、立つてここを出ようかと思いましたが。でもやつぱり考え直して、い場所があるうちはここにしようかと決めました。

「そんなぎゆうぎゆう押すなよう。息ができないよう」ととなりにすわつてたヤマネがいました。

「しょうがないでしょう。おつきくなってるんだから」とアリスは

とつてもよわよわしくいいました。

「なにもこんなところでおつきくならなくても」とヤマネ。

「バカなこといわないでよ。あなただつて、おつきくそだつてるんですからね」アリスはもうちよつと強くなりました。

「うん、でもぼくはふつうにおつきくなつてるんだからね。そんなとんでもないはやさじゃないよ」そしてヤマネは、プンプン怒つて立ちあがると、法廷をよこぎつて反対側にいつてしまいました。

この間ずっと、女王さまは帽子屋を見つめるのをやめませんで、ヤマネが法廷をよこぎつたと同時に廷吏の一人に申します。「前回のコンサート之歌い手一覽をもつてまいれ！」これをきいて、ひきんな帽子屋さんはガタガタふるえすぎて、くつが両方ともゆすりぬげてしまいました。

「おまえの証言をのべよ」と王さまは怒つたようにいいます。「さもないと、ビクビクしているかにかんけいなく、おまえを処刑させるぞ」「あつしは貧しいものでして、国王陛下」と帽子屋さんはふるえる

声できりだしました。「——そしてお茶もまだで——もう一週間ほとんどなんですが——んでもって、バターパンもこんな心もとなくなつてきて——それでキラキラの木が——」

「キラキラのなんともうした？」と王さま。

「ですから木からはじまつたんでして」と帽子屋さんはこたえます。

「キラキラがキではじまつておるのはとうぜんであろうが！」と王さまはきびしく申しわたします。「わしをそこまでうつつけ者と思うか！ つづけよ！」

「あつしあ貧しいもんでして」と帽子屋さんはつづけます。「でもつて、それからはなんでもキラキラで——でも三月うさぎが言いますに——」

「言つてない！」と三月うさぎがあわててわりこみます。

「言つた！」と帽子屋さん。

「否認します！」と三月うさぎ。

「否認しておる。その部分は除外するように」と王さま。

「まあとにかく、ヤマネが言いまして——」と帽子屋さんはつづけてから、不安そうに首をまわして、ヤマネも否認するかどうか心配そうにながめました。が、ヤマネはぐつすりねむっていたので、なにも否認しませんでした。

「それから、あつしはもつとバターパンを切つて——」と帽子屋さん。

「でもヤマネはいつたいなんと言つたんですか？」と陪審の一人がききました。

「それは思い出せません」と帽子屋さん。

「なんとでも思いだすのじゃ。さもないと処刑するぞ」と王さま。

みじめな帽子屋さんは、お茶わんとバターパンをおとして、片ひざをついちやいました。「あつしは貧しいんです、国王陛下」と帽子屋さんは口を開きます。

「はつげんのなかみは、たしかに貧しいな」と王さま。

ここでモルモットが一匹、かんせいをあげて、すぐに廷吏ていりに鎮圧ちんあつさ

れました。(これはちよつとむずかしいことばなので、どういふふうにやつたか説明しようね。おつきなずだぶくろがあつて、口にひもがついていてしばれるようになってるんだけど、モルモットはそこに頭からおしこまれて、そしてみんなでその上にすわつちやうんだ)。

「いまのは見られてよかつたな。よく新聞で、裁判の終わりに『拍手があがりかけたが、廷吏ていりによつてそくぎに鎮圧ちんあつされた』つてかいてあるのをよく見かけるけれど、いままでなんのことかぜんぜんわからなかつたもん」とアリスは思いました。

「それで知つてゐることのすべてなら、下がつてよいぞ」と王さまがつづけました。

「これ以上はさがれませんや、うしろに柵があるもんで」と帽子屋さん。

「ではすわるがよい」と王さまがこたえます。

ここでモルモットがもう一匹かんせいをあげて、鎮圧ちんあつされました。

「わーい、あれでモルモットはおしまいね。これでちよつとましに

なるかな」とアリスは思いました。

「それよりお茶をすませたいんで」と帽子屋さんが女王さまを心配そうに見ると、うたい手のいちらん表をよんでいるではありませんか。

「いつてよし」と王さまがいうと、帽子屋はあわてて法廷から出ていつて、くつをはくことさえしませんでした。



「——そしてあやつの頭を外ではねておしまい」と女王は廷吏ていりの一人に言い足しました。でも帽子屋さんぼうしやさんは、その廷吏ていりがとびらにつくより先に、すがたを消してしまいました。

「つぎの証人をよべ！」と王さま。

つぎの証人は公爵夫人のコックでした。手にはコシヨウのはこをもつていて、とびら近くの人がいつせいにくしゃみをはじめたので、アリスはそれがだれだか、法廷に入ってくる前から見当がつかまりました。

「証言をのべよ」と王さま。

「やだ」とコック。

王さまは心ぼそげに白うさぎを見ました。白うさぎは小声でもうします。「陛下、この証人を反対尋問はんたいじんもんしなくてはなりませんぞ！」

「まあどうしてもというのなら、しかたあるまい」と王さまはゆううつそうなようすで言いました。そしてうで組みして、コックにむかつてしかめつづらすうちに、目玉がほとんど見えなくなってしまうって、そしてふかい声でいいました。「タルトはなにできておるかな？」



「コシヨウ、ほとんど」とコック。

「とうみつ」とねむたい声がうしろでしました。

女王さまがかなきり声をあげます。「あのヤマネをふんじばれ！ ヤマネの首をちよん切れ！ 法廷からたたき出せ！ ちんあつしろ！ つねれ！ ヒゲをちよん切れ！」

しばらくは、法廷ぜんたいがヤマネをおいだすので、混乱しきっていました。そしてそれがおちついたころには、コックは消えています。

「まあよい」と王さまは、いかにもホツとしたようすでもうしました。「つぎの証人をよんでまいれ」そして小声で女王さまにいいました。「まったくおまえ、こんどの証人はおまえが反対尋問はんたいじんもんしておくれ。まったくわしや頭痛ずつうがしてきた！」

白うさぎがいちらん表をもたもたひらくのをながめながら、つぎの証人はどんな生き物かなと、アリスはまちどおしくてたまりませんでした。「——だってこれまではたいしたしょうこはまだ出てきてないん

ですもん」とアリスはつぶやきました。白うさぎが小さなかんだかい声をめいっぱいはりあげて、つぎの証人の名前を呼んだときに、この子がどんなにおどろいたか、想像できますか？ 白うさぎのよんだ名前は「アリス！」



## 一一一 アリスのしょうこ

「ここです！」とアリスは声をあげ、いっしゅんこうふんしてここ数分で自分がどれほど大きくなったかをすっかりわすれ、あわてて立ち上がりすぎて、陪審席をスカートのはしにひっかけてたおしてしまい、おかげで陪審たちがその下のぼうちよう席に、頭から浴びせられることになってしまいました。そしてみんなベシヤツと横になって、アリスは先週うつかりひつくりかえした金魚鉢のようすを、まざまざと思い出しました。

「あらほんとうにごめんなさい！」アリスはうろたえてさげび、できるだけすばやくみんなをひろいあげました。金魚鉢の事故が頭のなかをかけめぐって、なんだかすぐにあつめて陪審席にもどしてあげないと、みんなすぐに死んじゃうような気がばくぜんとしたのです。

王さまがとてもおもしろい声でもうします。「陪審員が全員しかるべきいちにもどらないかぎり、裁判をすすめることはできない——全

員、だぞ」と、とても強くくりかえしながら、アリスをにらみつけます。

陪審席をみてみると、あわてていたせいで、トカゲをさかさにつつこんでしまったのがわかりました。かわいそうなトカゲはかなしそうにしつぽをふつて、まるでみうごきができずにいたのです。すぐに出してあげて、ちゃんともどしてあげました。「でもべつにたいしたちはいじやないと思うけれど。あのトカゲなら、さかさだろうと裁判にはまるつきりえいきょうしないと思う」とアリスは考えます。

陪審たちが、ひっくりかえされたショックからすこし立ちなおり、石板と石筆がみつかつてかえされると、みんなすぐにこの事故のけいかを、こまごまと書きつけはじめました。ただしトカゲだけはべつです。トカゲはショックがつよすぎて、口をぽかーんとあけて法廷の屋根を見あげながら、すわっているだけでした。

「このいつけんについて、なにを知っておるかね？」王さまはアリスにききました。

「なんにも」とアリス。

「なんにもまったたく？」と王さまがねんをおします。

「なんにもまったたく」とアリス。

「これはきわめて重要じゃ」と王さまはばいしんにむかつて言いました。ばいしんたちがこれを石板に書き始めたところで、白うさぎが口をはさみます。「非重要と、もちろん王さまはいわんとしたのです」その口ぶりはとつてもそんけいがこもっていましたが、でも言いながら王さまにむかつて、しかめつつらをして変な顔をしてみせています。

「非重要じゃ、もちろんわしのいわんとしたのは」と王さまはあわてて言いました。そしてそのあとで「重要——非重要——重要——非重要——」と小声でぶつぶつぶつぷやいて、どっちのことばがしつくりくるかを決めようとしてるみたいでした。

陪審のなかには「重要」と書いたのもいたし、「非重要」と書いたのもしました。アリスは石板をのぞきこめるくらい近くにいたのです。「でもどうだっといういや」と思いました。

このとき、しばらくノートにいろいろなねっしんに書きつけていた王さまが「せいしゆくに！」とかなきり声をあげて、ほうりつ書をよみあげました。「規則だい四十二番。身のたけ一キロ以上のは、すべて法廷を出なくてはならない」

みんなアリスのほうを見ました。

「あたし、身長一キロもないもん！」とアリス。

「あるね」と王さま。

「二キロ近くあるね」と女王さま。

「ふん、どつちにしても、あたしは出ていきませんからね。それに、いまのはちゃんとした規則じゃないわ。いまでつちあげただけでしょう」

「ほうりつ書で一番ふるい規則じゃ」と王さま。

「だったら規則一番のはずだわ」とアリス。

王さまはまっさおになり、ノートをあわててとじました。そして陪審にむかって小さなふるえる声で「判決を考えるがよい」ともうしま

した。

「まだしようこが出てまいります、おねがいですから陛下」と白うさぎがあわてて飛び上がりました。「ちょうどこのかみきれが手に入りましたのです」

「なにが書いてあるのじゃ？」と女王さま。

「まだあけておりませんで」と白うさぎ。「でもなにやら手紙のようで。囚人が書いたものようです——だれかにあてて」

「そうだったにちがいない。ただし、だれにもあてていないかもしれないぞ、めったにないことではあるがな」と王さま。

「だれあて？」と陪審の一人。

「あて先がまつたくないのです。じつは、外側にはなにも書かれていないのです」こういいながら、白うさぎはかみをひらいて、つけたしました。「やっぱり手紙ではありませんでした。詩です」

「囚人の筆跡かい？」とべつの陪審がききます。

「それがちがうのです。一番なぞめいた部分ですな」と白うさぎ。



（陪審たちはみんな、ふしんそうな顔をします。）

「だれか別人の筆跡をまねたにちがいない」と王さま（陪審たちはみんな、顔がパツとあかるくなりました）。

「おねがいです、陛下。わたしは書いておりませんし、だれもわたし書いたとは証明できないはずです。最後にしよめいもないじゃないですか」とジャック。

「しよめいしなかったのなら、なおわるい。きさまはまちがいなくなにかをたくらんでおつたろう。さもなければ、正直者としてちゃんとしよめいをしたであろうからな！」と王さま。

これにはあちこちではくしゆがおこりました。この日、王さまが言つたはじめての、まともにかしこいことだったからです。

「これであやつのゆうぎいが証明された」と女王さま。

「ぜんぜんそんな証明にはならないわ！」とアリス。「だいたいみんな、なにが書いてあるかもまだ知らないくせに！」

「読むがよい」と王さま。

白うさぎはめがねをかけます。「どこからはじめましょうか、陛下？」  
王さまはおもしろくもうします。「はじめからはじめるがよい。そ  
して最後にくるまでつづけるのじゃ。そうしたらとまれ」

白うさぎが読みあげた詩は、こんなものでした

「きみが彼女のところへ行って、

ぼくのことを彼に話したときいた

彼女はぼくをほめてはくれたが、

ぼくが泳げないといった。

彼はみんなにぼくが去っていないと報せた

(これが事実なのはわかっている)

彼女がこの件を追求したら、

きみはいつたいどうなる？

ぼくは彼女に一つやり、みんなはかれに二つやり、

きみはぼくらに三つ以上くれた  
みんな彼からきみへもどった、  
かつてはみんなぼくのだったのに。

もしぼくか彼女がたまさか

この事件に巻き込まれたら

彼はきみにかれらを解放してくれという、

ちやうどむかしのぼくらのように。

ぼくの考えではきみこそが

(彼女がこのかんしゃくを起こす前は)

彼とわれわれとそれとの間に

割って入った障害だったのだ。

彼女がかれらを一番気に入っていたと彼に悟られるな  
というのもこれは永遠の秘密、

ほかのだれも知らない、

きみとぼくだけの秘密だから」

「これまできいたなかで、もつとも重要なしようこぶつけんじや  
と王さまは、手もみしながらもうします。「では陪審は判決を——」



「あのなかのだけれども、いまの詩を説明できるもんなら、六ペンスあげるわよ」（アリスはこの数分ですごく大きくなつたので、王さまの話をさえぎつても、ちつともこわくなかつたんだ）「あたしはあんな詩、これっぽっちも意味はないと思うわ」

ばいしん 陪審はみんな、石板に書きつけました。「この女性はある詩、これっぽっちも意味はないと思う」でもだれもそれを説明しようとはしません。

「これっぽっちも意味がないなら、いろいろてまがはぶけてこうつごうじゃ、意味をさがすまでもないんじやからの。しかしどうかないと王さまは、詩をひぎのうえにひろげ、かた目でながめてつづけます。「どうもなにかしら意味はよみとれるように思うんじやがの。『——泳げないといった——』おまえ、泳げないじやろ？」と王さまはジャックのほうをむきます。

ジャックはかなしそうに首をふりました。「泳げそうに見えますか？」（たしかに見えなかつたね、ぜんしんがボールがみでできていたもの）。

「いまのところはよいようじゃな」と王さまは、詩をぶつぶつつぶやきながら、先をつづけけます。「『これが事実なのはわかっている』——これはもちろん陪審じゃな——『ぼくは彼女に一つやり、みんなはかれに二つやり』——なんと、これはこやつがタルトでしかしたことはないか——」

「でも、『みんな彼からきみへもどつた』つてつづいてるじゃないの」とアリス。

「ほうれ、そこにもどつておるではないか！」と王さまは勝ちほこつて、テーブルのタルトを指さしました。「明々白白ではないか。しかし——『彼女がこのかんしゃくを起こす前』とは——つまよ、おまえはかんしゃくなど起こしたことはないと思うが？」と王さまは女王さまにもうしました。

「一度もないわ！」と女王は怒り狂つて、あわせてインクスタンドをトカゲに投げつけました。（かわいそうなビルは、あれから一本指で石板に書くのをあきらめていました。なんのあともつかなかったから

です。でもいまや急いでまた書きはじめました。自分の頭をつたいおちてくるインキを、なくなるまで使ったのです。

「ではこの詩があてはまらなくてかんしゃしよう」といって王さまは、につこりと法廷を見まわしました。あたりはしーんとしています。「しゃれじゃ！」と王さまが、むつとしたようにつけたしますと、みんなわらいました。「では陪審は判決を考えるように」と王さまが言います。もうこれで二十回目くらいです。

「ちがうちがう！　まずは処刑——判決はあとじゃ！」と女王さま。「ばかげてるにもほどがある！」とアリスが大声でいいました。「処刑を先にするなんて！」

「口をつつしみおろう！」女王さまは、むらさき色になつちやつてます。

「いやよ！」とアリス。

「あやつの首をちよん切れ！」女王さまは、声をからしてさげびます。だれも身動きしません。



「だれがあんたたちなんか気にするもんですか！」とアリス（このときには、もう完全にもとの大ききさにもどってたんだ）「ただのトランプの東のくせに！」



これと同時に、トランプすべてが宙にまいあがって、アリスのうえにとびかかっってきました。アリスはちよつとひめいをあげて、半分こわくて半分怒って、それをはらいのけようとして、気がつくど川辺によこになつて、おねえさんのひぎに頭をのせていたのでした。そしておねえさんは、木からアリスの顔にひらひら落ちてきた枯れ葉を、やさしくはらいのけているところでした。

「おきなさい、アリスちゃん！ まったく、ずいぶんよくねてたのね！」

「ね、すつごくへんな夢を見たの！」とアリスはおねえさんに言つて、あなたがこれまで読んできた、この不思議な冒険を、おもいだせるかぎり話してあげたのでした。そしてアリスの話がおわると、おねえさんはアリスにキスして言いました。「それはとってもふうがわりな夢だったわねえ、ええ。でもそろそろ走つてお茶にいつてらっしやい。もう時間もおそいし」そこでアリスは立ちあがってかけだし、走りながらも、なんてすてきな夢だったんだろう、と心から思うのでした。

でもおねえさんは、アリスがいつてしまつてからも、じつとすわつてほおづえをつきながら、夕日をながめつつアリスとそのすばらしい冒険のことを考えておりました。するとやがておねえさんも、なんとなく夢を見たのです。そしておねえさんの夢は、こんなぐあいでした。

まず、おねえさんは小さなアリス自身のことを夢に見ました。そしてさつきと同じように、小さな手がこちらのひぎのうえでにぎりしめられ、そして明るいきいきとした目が、こちらの目をのぞきこんでいます——アリスの声がまざまざときこえ、いつも目にかぶさるおちつかないあのかみの毛を、へんなふり方で後ろに投げ出すあのしぐさも見えます——そしてそれをきくうちに、とうかきいているつもりになるうちに、おねえさんのまわりがすべて、妹の夢の不思議な生き物にいのちをふきこむのでした。

白うさぎが急ぐと、足もとで長い草がカサカサ音をたてます——おびえたネズミが近くの池の水をはねちらかして——三月うさぎとそのお友だちが、はてしない食事をともにしているお茶わんのガチャガチャ

いう音が聞こえます。そして運のわるいお客たちを処刑しろとめいじる、女王さまのかなきり声——またもやぶた赤ちゃんが公爵夫人のひざでくしやみをして、まわりには大皿小皿がガシャンガシャンとふりそそいでいます——またもやグリフォンがわめき、トカゲの石筆がきしり、鎮圧されたモルモットが息をつまらせる音があたりをみだし、それがかなたのみじめなにせウミガメのすすり泣きにまじります。

そこでおねえさんはすわりつづけました。目をとじて、そして自分が不思議の国にいるのだと、なかば信じようと思いました。でも、いずれまた目をあけなくてはならないのはわかっていました。そしてそうなれば、まわりのすべてがつまらない現実にもどつてしまうことも——草がカサカサいうのは、風がふいているだけだし、池はあしがゆれて水がはねているだけ——ガチャガチャいうお茶わんは、ヒツジのベルの音にかわり、女王さまのかなきり声は、ヒツジかいの男の子の声に——そして赤ちゃんのくしやみ、グリフォンのわめきなど、いろんな不思議な音は、あわただしい農場の、いりまじったそう音にかわつて

しまう（おねえさんにはわかっていたんだ）——そして遠くでいななくウシの声が、にせウミガメのすすり泣きにとつてかわることでしょう。

最後におねえさんは想像してみました。この自分の小さな妹が、いずれりっぱな女性に育つところを。そして大きくなってからも、子ども時代の素朴で愛しい心をわすれずにいるところを。そして、自分の小さな子どもたちをまわりにあつめ、数々の不思議なお話でその子たちの目を、いきいきとかがやかせるところを。そのお話には、ずっとむかしの不思議の国の夢だつて入っているかもしれない。そして素朴かなしみをわかちあい、素朴なよろこびをいつくしみ、自分の子ども時代を、そしてこのしあわせな夏の日々も、わすれずにいるところを。

# 訳したやつのいろんな言い訳

いやあ、ほかならぬこの本について、いまさら何かぼくがつけくわえることがあるかね？ まあいちおう、さくしやともの本のごときは書いておこうか。

\* \* \* \* \*

この本を書いたのは、ルイス・キャロルという人だけれど、これはペンネーム。本名はチャールズ・L・ドジソンといって、十九世紀の前半くらいにイギリスの数学の先生だった人だ。この人は、ロリコンのへんたいで、ちっちゃな女の子をはだかにして写真をとるのがだいすきだった。いまならカメラこぞうとかいわれる人になったかもしれないね。

このお話は、一八三二年に出版された。もとは近所の三人姉妹の女

の子たちにせがまれて、ドジソン先生がその場の思いつきででっちあげたお話だ。アリスというのも、その女の子たちの一人。一番下の妹だった。お話のなかに出てくる「ダイナ」というねこも、この子たちがほんとうに飼っていたねこの名前なんだって。それがおもしろかったので、そのまま本にして出した。その後、ちよつと書き直したところもあるらしいけれど、まあほとんど変わっていない。それがベストセラーになって大評判になって……そしていままでつづいている。

それともう一つ、このお話にとって決定的だったのが、ここにも入れたイラストだ。ルイス・キャロルは「アリス」をちよつと書き直している、ときつき書いた。何度めかの書き直しで出版したときに、イラストを描いたのがジョン・テニエルという人だ。そして人がかいたこのイラストは、どういうわけかアリスという子のイメージを完全にきめてしまった。じつはこのアリス、じつさいにこのお話を最初にきいた、三人姉妹のアリス（つまりほんとのモデル）とはぜんぜん似ていないんだって。でも世界中の人が、「アリス」といって思いうかべる



のは、このイラストのイメージだ。ちがったイラストをつけようとした人もいっぱいいる。でも、テニエルをしのぐものは一つもない（足もとに及ぶものさえない）。デイズニーがこれをアニメにしたんだけど、そのときもこのテニエルの絵に完全にえいきょうされているし、金子国義という日本でちよつと有名な画家が、アリスが大好きで自訳自挿画のアリス本を先日出したんだけど、そのイラストもテニエルの呪縛からは逃れられていない。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

もともと子ども向けのお話ではあるんだけど、このお話はなんだかみように、おとなたちに人気が出ちゃった。この「アリス」をつつきまわしているんな出まかせや思いつきをいう人はたくさんいる。まあ出まかせやおもしろいつきにも、おもしろいの、つままないのいろいろある。

たとえばぼくたちのいるこの宇宙は、どんどんふくらんでいることがわかっていられるんだけど、このお話でアリスがのびたりちぢんだりするのは、その宇宙のぼうちようとしてるじゃないか、とかね。こういうたとえばは、人によつてはおもしろいな。

あと、大人になると、人間はとてもエッチになるので、のびたりちぢんだりというときとみんなすぐにおちんちんのことを考えちゃうのだ（ああ、大人のおちんちんはのびたりちぢんだりするんだ。でも、みんなそれをはずかしいことだと思つているので、お父さんとかにきいたりしないほうがいいよ）。棒みたいなものが出てくると、それもじつはおちんちんなんじゃないか、と思つたりする。あるいは女の子は、おちんちんのかわりにわれめがついているので、すきまとかわれめとか出てくると、みんな女の子のわれめじゃないかな、と思つたりするんだ。そういうことを考えすぎて頭がおかしくなっちゃつて、それで「アリス」をすみからすみまでさがして、棒だの穴だのわれめだのをかぞえてよろこんでる人たちも、ずいぶんいっぱいいるんだ。棒は78本ある

んだって。バカだね。

なぜこれが、大人に人気があるのかは、じつはよくわからない。わからないので、それをいっしょうけんめい考えているような、これまたひまな人もたくさんいる。こういう人たちのいうことは、まちがいないにとつてもくだらないので、あまりまじめにきいたりしないほうがいいよ。ひとは、なにかを見ると、ついつい意味を考えちゃうんだ。特にどつかで見たようなものを見かけると、なんか理由があつてそれがそこにあつたんだらう、とおもつてしまう。

たとえば変な夢を見ると、それがときどきずっと気になることがある。その夢に、なんか意味があるような気がする。夢の中で、満員電車のむこうのほうにお父さんがいて、にこにこしてこつちをじつと見ている。でも、そのお父さんには影がない。満員電車なのに、どうして影がないのがわかるんだらう。でもわかる。そしておとうさんはずっとぼくを見ている。ぼくはそんな夢をみたことがある。すると起きてからも考えてしまうんだ。あのときお父さんは、なぜに

ここにこしていたんだろう、なぜ影がなかったんだろう、と。でも実は、それはぼくが頭の中でこしらえたお父さんの姿で、ほんとお父さんじゃない。だから「なぜ」なんて理由があるわけがないんだ。でも気になる。

「アリス」もそれと同じだ。ときどきみんなが、ふと考えて、そのままわすれてしまうような変なおもいつきが、ここにはいつぱい入っている。それでぼくたちは、それになんか意味があるように思ってしまった。でも、ほんとはそんな意味はないのかもしれない。そんなものも考えても、しょうがないのかもしれない。そしていろいろ考えて「わかった!」と思っても、ほんとにそれが正しいかどうかはわからない。夢と同じで、あなたがそういうものをかかってに頭の中で作っちゃっただけかもしれない。そしてルイス・キャロルはもう死んじゃってるし、だからきくわけにもいかないので、それはいつまでたってもわからないままだ。

ルイス・キャロルも、たぶんわからなかったんだろう。夢をなんと

なく見るのと同じで、これもなんとなく書いちゃったんだろうと思う。あるいはときどき、なんだかみように調子よくじょうだんをポンポン思いつくことがあるだろう。それと同じで、キャロルも調子がよかつただけなのかもしれない。調子がつつてもよかつたもんで、このあとルイス・キャロルはこのお話のつづきを書いた。それが『鏡の国のアリス』だ。これは、この『不思議の国のアリス』の3.1415倍くらいへんてこで、不思議で、わけのわからない、でも（いや、だからこそ）おもしろくてすてきなお話なんだ。これはそのうちまたぼくが訳すけど、時間はこれよりずっとかかるだろう——いやどうかな、ぼくの調子が出たら、あんがいすぐできるかも。

そしてそれにつづいて、キャロルは『スナーク狩り』という詩を書いた。これまたわけのわからないじょうだんだらけの、とつてもおもしろい詩だ。このときもキャロルは、まだ調子がよかつたんだ。

だけどそのあとでキャロルが書いたのが『シルヴィーとブルーノ』『シルヴィーとブルーノ完結編』というお話だった。ながくて、お説

教くさくて、イマイチだ。ところどころ、おもしろい部分もないわけじゃない。でも、この「アリス」みたいなおもしろさはない。キャロルでさえ、自分がなぜこんなおもしろいものが書けたか、わかってなかったんだらう。そして、急に調子が悪くなっちゃったんだらう。それでも、この二つの「アリス」だけで、ルイス・キャロルはたぶんこの先何百年も、わすれられることはないはずだ。

\* \* \* \* \*

このお話は、もう世界中で読まれていて、まあありとあらゆることばにほんやくされているんだ。日本でもずいぶんむかしからほんやくはある。みじかいし、好きな人もたくさんいるのでまあ、うまいの、へたなの、どうしようもないの、といっぱいある。

ぼくがこれを訳したのは、やっぱり日本で何人目かのアリス訳者になりました。いまある訳がそんなに悪いわけじゃない。な

かには、アリスをいまの女の子ちつくにしようとしすぎて、がらの悪いスケバン（ふるいね）まがいにしちやった訳とか、ことばあそびにこだわりすぎて、なんだかとおつてもわざとらしい、ふしぜんものにしてしまった訳（柳瀬尚紀の、漢字だらけのおつかないほんやくとかね）もあるけれど、高橋康也の訳とか、矢川澄子の訳とかは、わるくはない。でも、それでもなんだかよどむ。こう、うまく流れないところがある。高橋さんは学者で、矢川さんは詩をかく人だけど、こういう人は自分でいっしょうけんめい考えたりものを書いたりするのがおしごとだ。だから本や紙とばかりにらめっこをしている。それで、よのなかの人のふつうのしゃべりかたとかは、あんまり知らなかったりする。口にだしたときのひびきと、字に書いて目にみたときの感じとでは、字に書いた方をだいにしちやったりする。なーんてことおもって首をかしげてるより、自分で気がすむように訳したほうがはやい。それで訳しちゃった。

それに、この人たちの訳は、コピーしてお友だちにあげたりしては

いけないんだ。おもしろいな、と思って人にメールで送ってもだめ。この人たちは（ぼくもだけれど）自分が書いたものについて、ちよさくけん、というものを持っている。これははたみたいなもので、「これはわたしがオツケーといわないと人にみせたりあげたりしちやダメですよ」と書いてあるんだ。だからきみたちがこの人たちの文を勝手に人にあげると、この人たちがそのはたをパタパタとふる。するとそれを見て、おまわりさんがくることになっている。こつそりやればたぶんわからないけれど、でもだからといってやっていいわけではない。

じつは、はたを持っているのは書いたり訳したりした人だけじゃない。ふつう、本をつくるときには、いろんな人がいろんなおしごとをする。字がまちがっていないかを確かめる人もいる。イラストをどこにいれようか、とか字の大きさをどのくらいにしようか、とか、決める人もいるし、ひょうしをつくる人もいる。一番読みやすくてきれいになるように、デザインする人もいるし、印刷する人もいるし、本屋さんまでそれを運ぶ人もいる。その人たちみんなが小さなはたをもつ



ている。

でも、だれかに見せたいな、と思ったとき、いちいち書いた人に「いいですか」ときくのはめんどくさい。じゆうしょも電話番号も知らないし。それにさいきんでは、みんながはたをふりたがるようになってしまったもので、いったいだれがはたをもってるのかさえわかんなくなっている。だからぼくは、この文にはそういうのはたをつけないことにした。ついでにほかの人も、そういうのはたをつけちゃいけないことにした。これでみんな、もつときらくに文がつかえるようになる、はずだ。

それにこの訳は、電子ファイルにもなっているんだ。いままでみたいに紙の本でしか読めない、「三月うさぎはどこにいたかな」と思ってもさがすのがたいへんだ。電子ファイルにしておくと、コンピュータがそういうことをやってくれる。そんなべんりさもあるんだ。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

どんなにべんりで、じゃまなはたがなくても、訳したものがまちがってたり、へたくそだったりしたらどうしようもない。でもぼくは、いまままで日本でほんやくをしてきた人の中では、かなり上手なほうなので、あまり心配しなくていい。なかには、ニンジンがきらいな子がいるのと同じように、ぼくの訳がどうしても好きになれない人もいるし、それよりぼくという人間がきらいな人もいる。でも、そういう人がいっしょうけんめいさがしても、この訳でホントにまちがってるところはなかなかみつからないだろう。ぼくはこのお話をなんども読んで、かなりよく知ってるんだもの。

ただしさつきもいったように、これはもう何度もほんやくされてるお話だ。だからいままでの人たちも、もうずいぶんいろいろくふうをしてきた。だもんで、ぼくがやったからといって、そんなすつごく訳がよくなったりはしていない。いまある訳としても、ぶつちぎりの一番じゃなくて、二ばんとの差はほんのちよつとしかない。

\*

\*

\*

\*

\*

訳すときには、たいした注意はしていないけれど、ただなるべくアリスの話かたを自然にしようとした。これまでの訳だと、アリスは自分でぶつぶつ言っているときにも、かなりよそゆきのことばをしゃべったりしてる。それってへんだらう。アリスはずいぶんむかしの女の子だから、たしかにちよつと古いしゃべりかたをしているけれど、でもそこ頃の人たちとしてはごくふつうにしゃべってたはず。そのふつうなところをちゃんと出したいな、と思ったわけだ。

とはいえ、これはちよつとむずかしい。このお話で、アリスはのつくらいだらうけれど、でもじつは最近の日本の高校生でも知らないようなことをたくさん知っている。たとえば最初のところでうさぎの穴を落ちながら、アリスは地球のまん中までどのくらいあるかを、すぐにおもいだせる。あるいはフランス語もちよつとしゃべれちゃったりする。すごいね。むかしの人はいっぱい勉強したんだ。だからふつうに訳すと、すぐくものしりな高校生もどきがしゃべってるみたいに聞こえちゃうんだ。そこはなんとかくふうして、小学校の年生くらいのの

口ぶりにはしたつもりだけれど、それでもかなりませた感じになる。でも、これでせいじっぱいなのでゆるしてね。

そしてそれ以外のところも、だれかが女の子に読んできかせている、という感じをだいにしようとしている。ふつう、こういうのを読んではあげるときは、ふつうに読みながら、ちよつとむずかしいところや説明なんかを、ちよつと口ぶりを変えてはさんだりする。文中でかつこゝに入っているのがそういうところだ。そういうところで口ぶりを変える感じもだそうとした。

で、それはうまくいつてるかな？　ぼくはわれながら、なかなかじょうずにできたと思っっているけれど、それはみんなが自分で読んできめてほしい。「こうしたほうがいいよ」と思ったら、それをぼくに教えてくれてもいいし、あるいはこの文をもとにして、自分流の訳をつくったり（そのときは、ぼくのをもとにしてるつてことは書いておくようにね）、それともこんな訳なんか完全にうっちゃって、まっさらな訳を自分でやってみたりする人が、もつともつと出てくるといいな。

\* \* \* \* \*  
みじかくすませるつもりが、えらく長くなつてしまいました。では、  
次の『鏡の国のアリス』でまたお目にかかろう。じゃあね。

一九九九年一月

アリスがおちていった先のオーストラリアにて  
山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)